嘘嘘嘘、でも愛してる

川田戯曲

ファンタジア文庫

2949

口絵・本文イラスト　アシマ

プロローグ

どうして人の気持ちはままならないのだろうと、彼女は考える。

好き、嫌い――それが基本。興味がない、というのはそもそも、感情として成立していないので、この場合は考えなくて良い。

そして、その二者択一で言えば、彼女は彼が好きだった。

ただ、その『好き』にも、大きく分けて二つの区分が存在しており――愛情か、もしくは恋慕か。そんなざっくりとした分類があったあとで、更に細分化された箱があり、それは例えば劣情や寵愛、愛欲や親愛なんてのがそうだ。そのどれもが少しずつ違うもので、じゃあ自分のこの気持ちは、どこに区分けされるものなのだろうか。

答えはすぐに出た。

愛憎。シンプルな答えだった。

大好き大好き大好き死ね大好き大好き殺したい大好き死ね大好き大好き死ね大好き！

言語化してしまえば、そんな幼稚な思考。どこで何を間違ってしまったのか、そもそもは綺麗だったはずのそれは、いつの間にか醜悪な殺意でデコレーションされていた。

最初に芽生えたのは、可愛らしい好意だった。綺麗な庭に力強く咲いた、一輪の花。傲慢さなど持ち合わせていない、誰から見ても愛らしい、それはささやかな親愛であった。

しかし、その花はいつの間にか、見るも無残に枯れていた。

代わりに、いま彼女の胸に渦巻くのは、愛憎から成る醜い嫉妬心。心に形はないけれど、もしあったのなら、誰もが目を背けるような醜悪な形をしているに違いない。

――そうして、彼が決定的な一言を告げる。

そう、それが決定的だった。それさえなければ――それでも彼女は。

その醜い気持ちを、隠していられたかもしれないのに。

「――。――――、――――――」

ぱりんと、砕ける音がした。

それは心ではない、自制心が砕ける音。

感情を繋ぎとめていた理性、その鎖が引きちぎられた音。

彼女にはそもそも、その素質があった。それを育てるだけの時間があった。

だから。

だから、彼女は――――。

第一章　スカートひらり

「ねえ、くーたん。くーたんはどういうタイプの女が好きかしら？」

「……い、いきなり何なんでしょうか？」

同年代の女の子に、つい敬語でそう尋ね返した。しかし、俺のそんな言葉に対して、黒髪ロングの彼女は笑みを浮かべるのみ。いや、笑顔じゃなくて答えが欲しいんだが……。

そうして困惑していると、次いで、茶髪ショートカットの女の子が口を開いた。

「……そういえば、くーくんにそういうのを聞いたことって、あたしもあんまなかったかも。うりうりー、どうなのさー？」

「ちょ、肘でつつくなよ……つか、突然そんなこと言われてもな……」

「昔と今とで、好きなタイプもちょっと変わってたりするのかな？　――じゃあ、あたしにもワンチャンあったりして？　彼女みたいにおっぱいばいんばいんじゃないあたしにも、光明があったりして!?」

「自慢じゃないけれど、Fカップよ。本当に自慢じゃないけれど」

「自慢じゃないと繰り返すことで、より自慢だと強調してるのがいけ好かない」

先の二人に続いて、白髪ミディアムの少女も声を出した。黒髪ロングの女の子が腕組みをして胸を強調しているのを見て、自分でも試してみたが――なんの強調にもならなくて舌打ちをする。……気を取り直したように、白髪ミディアムの子は続けた。

「そもそも、話が少しずれてる。いまの議題は、くーさんのタイプがどんな女なのかであって、別におっぱいがあるないの必要性は彼次第。――くーさん。早くこいつらに言ってやって。世界平和と同じくらい、俺は貧乳を愛してるって」

「それ、世界平和が乗っかっちゃってる時点で、胡散臭くなってないか？」

俺がそう言うと、白髪ミディアムの彼女は不満げに頬を膨らませ、俺を睨む。それに居心地が悪くなって別の方に視線をやると、茶髪ショートカットの少女が首を傾げていた。

「でも実際、どうなのかな？　くーくんは貧乳と巨乳で言ったら、どっちが好きなの？」

「……え、なに？　これ俺、本当に答えないといけない流れなのか？」

「答えないといけない流れだねー。ちなみに、その二つとも微妙なんだったら、新しい選択肢――『普乳』が好きという手もあるけど、どうかなっ？　普乳党支持派のあたしとしては、とても魅力的な勢力だと思うよ！」

「そうかしら？　それって要するに、どこの需要も満たしていないということだと思うけれど」

「大にも小にもなれない半端モンは黙ってて」

「うわーんっ！　くーくん！　巨乳と貧乳が普乳をいじめてくるよー！」

「お、おう。それはドンマイ？　……どうでもいいけど、『ふつにゅう』って単語初めて聞いたぞ」

「くーくんは違うよね？　貧乳よりも巨乳よりも、普乳が至高だよね!?」

「いや……こうして縛られてるとこ、悪いんだが……まあ、その、なんだ。俺も結局は、男でしてね？」

「な、なにその、申し訳なさそうな笑みは……怖い……怖いよその顔！　具体的には、不祥事をやらかした会社の下請けが、お父さんの勤め先だった時くらい怖いよう！」

「なんかえらく生々しい例えを出してきたが……ともかく、結論を言わせてもらうと」

俺はそこで一つ言葉を切ると、呼吸を整えてから告げた。

「おっぱいは、大きければ大きいほど嬉しい」

「ちくしょー！」

茶髪ショートの少女が俺の右頬に強烈なビンタをくれた。すぱぁん！　と小気味いい音。

いや、なにしてくれてんの……俺一応、病人なんだけど。

ちなみに、俺が問題発言をした直後、黒髪ロングの少女は「しゃっ！」とガッツポーズ

を取り、白髪ミディアムの少女は「けっ」と悪態をついていた。
　そして、勝ち誇った様子の黒髪ロング少女が、その大きな胸を張りながら言った。
「いいえ、何も恥じる必要はないのよーたん。別にあなたが特殊な訳ではないわ。男性として、乳房の大きい女を求めるのは当たり前のことで、女の体が年を経るほどに丸みを帯びるのは、男にそう求められるからだもの。――ちなみにだけれど、私の体のパーツの中では、お尻なんかも大きくて丸いからオススメよ」
「……デカパイ淫乱ビッチ」
「何か言ったかしら、まな板少女さん」
「まな板じゃない。私ちゃんとCカップのブラつけてる。まな板じゃない」
「ねえ知ってるくーたん。この世にはリフトアップブラというのがあってね――」
「その牛みたいな乳引きちぎってやる！」
　黒髪ロングの少女が何か言いかけたところで、白髪ミディアムの少女が彼女に挑みかかっていった。宣言通り、黒髪ロングの少女の両胸を鷲掴みにし、「憎い、憎い！」と恨み言を吐きながら、それをもみくちゃにする。黒髪ロングの少女は痛そうに喘いだ。
「いた、んあっ……っつ、直接攻撃はやめなさいよ！」
「くっ、ブラの上からでも柔らかいのが、私の怒りの炎に油を注ぐ……せめて一部だけでも、引きちぎってやる……！」
「……」
「ちょ、くーくん!?　何を無言になって、二人のくんずほぐれつを見てるのかなっ!?　あなたは見ちゃダメだよっ！　術後の体に障るから！」
「ちょ――やめ、目隠しをしないでください！　むしろこれ、最高のリハビリだから！　やめろっておい！」
　突如始まったキャットファイトを見てにやついていると、残った一人――茶髪ショートの女の子がその両手を俺の両眼に添えた。……正直、女の子に『だーれだ』をされてるこの状況にドギマギしないでもなかったが、俺はそれよりも、貧乳の少女が巨乳の女の子の胸を揉みしだく、というレアシチュエーションを凝視したいのだった。はよ見せろ！
　そうして暗闇に包まれた視界の中、「あん、はんっ」という艶やかな音と、「くそう、くそう……！」という涙声が反響する。なので俺は一刻も早く、俺の両眼を押さえている女の子の手をどうにかしたかったが……そもそも、彼女の腕を握って、それを払いのける、という行為自体に抵抗を覚えた俺は、結局、茶髪ショートの子にされるがままだった。
　そんなこんなで、数分後。
「「はあっ、はあっ……」」

一人は揉み疲れ、一人は揉まれ疲れ、一人はこの状況が終わったことに安堵して……そのまま、三人は手近な椅子に座った。一体なんだこれ。今更ながらそう思う俺。

そして俺は、かねてより彼女達に聞きたかったことを、乱暴な口調で告げるのだった。

「そんで？　お前ら一体誰よ」

◆◆◆

逆行性健忘。それが俺の患った病気の名前だ。

高校二年生になり、二学期の中間テストを終えた十月半ば――俺は事故にあった。

ドライブレコーダーによると、暗い夜道の中、公園そばの歩道から俺の体が急に車道へ飛び出してきたらしい。車がそれをはね、俺の体は中空に舞い上がり、接触地点から約三メートルも遠い場所にごとりと落ちた。

運が悪いことに、頭から。

ただ運のいいことに、死にはしなかった。事故直後、運転手の人がすぐさま救急車を呼んでくれたようで、その甲斐もあって、なんとか一命は取り留めたのだ。

そうして生と死の境をさまよい、お医者さんの尽力によってこっち側に引き戻された俺は、しかし万全の状態とは言えず――今までの記憶を全て失くしていた。

事故それ自体も覚えていない。思い出そうとしても、そこには空白があるのみだ。
ただ日常生活が一人では送れないレベルで、何も覚えていない訳ではない。文字の読み書き、簡単な数学問題、生活に必要な普通名詞。直近の授業なんかは覚えていないので、クラスメイトと比べると若干バカになったが……それでも、知識は零れていなかった。
零れたのは他人との記憶。それから、肉親との思い出だ。
目覚めてすぐ、俺の前に父親と名乗る人物が現れた。名を久利。俺は彼から俺の家庭事情を知った――八年前に母親が死んでからは、父と二人暮らしだったらしい。
仲良し親子、とはいかなかったようだが、彼の話し方、態度を見ていればわかる――愛されていたらしい。不器用な父と二人暮らし。いまはこの人と過ごした日々を何も思い出せないが、それでも、彼が父親だというのは何故かすとんと俺の腑に落ちた。
そうして事情を全部説明されてから、彼は俺にこう言った。
「すまんな、くー助。すまん……」
何を謝ることがあるんだと、俺は父親と名乗る男に言い返した。たぶん、俺が生死をさ迷っている間、何もできなかったことを謝ってくれたんだろう。――そうすることでしか、自分の心を保てなかったのだ。
そんなこんなで、俺これからどうすっかな……とりあえず記憶を取り戻すために、色々

と頑張ってみるべきなんかな――なんて思っていた矢先に、先の騒動だ。
どたどたと女子三人が俺の白しかない病室に色を添えるように入ってきて、勝手に傍らの椅子に座ったと思ったら、その中の黒髪ロングの女の子がいきなり言い放ったのが、
『ねえ、くーたん。くーたんはどういうタイプの女が好きかしら？』
であった。
いや、つか俺、くーたんって呼ばれてんのかよ。
「……そうよね。つい普通に話し始めてしまったけれど、くーたんは私達のことを、忘れてしまったのだものね」
「あたしの顔を見たら、くーくん、思い出してくれると思ってたのに……うう……」
「くーさん、薄情者。人間のクズ。ゴミ溜め」
「いや明らかに言い過ぎだろそれ」
俺がそうツッコむのも無視しつつ、三人は三人だけでこしょこしょ話を始めた。それが終わると、まず黒髪ロングの少女が立ち上がり、俺に向かって告げる。
「それじゃあ、改めて自己紹介するわね。――私の名前は色町紙織。くーたんとは同じクラスで、よく一緒にお昼を食べる仲よ」
その言葉を聞きながら、俺は彼女を見やる――目鼻立ちのきりっとした、大人の女性の

ような色香をたたえた、美しい少女だった。鴉の濡れ羽色をした艶やかな髪は、腰まで届きそうなほど長い。身長は普通だが、体つきは少女らしからぬ扇情さで、胸が大きく、腰がくびれ、尻が突き出ているという……同級生とは思えない艶姿である。

見蕩れていると、彼女――色町が椅子に座り、次の少女が立ち上がった。

「そんで、あたしが花屋敷花蓮。くーくんとは小、中、高と一緒にいる幼馴染だよ！　改めてよろしくね！」

次に立ち上がった彼女は、冬にもかかわらずうっすらと小麦色の肌をした、快活そうな女の子だった。女性的な線を損なわず、薄くついた筋肉。控えめだが膨らみを見せる胸。明るい茶の色をしたショートカットの髪型はエネルギッシュな彼女に似合っていて、そして何より、くりくりとした目が印象的な顔立ちが愛らしい。

それから、花屋敷が勢いよく椅子に座り直すと、静かに最後の一人が立ち上がった。

「私は雪縫霙。くーさんとは、ええと……ともかく、仲良くしてた。また、よろしく」

何故か歯切れ悪くそう自己紹介した彼女は、名前通り、肌も雪のように白い少女だった。身長が低く、体は胸を含め肉付きがあまりない。だが、それで貧相なイメージを受けるかといったらそうではなく……恵まれた容貌に、華奢な体軀。ミディアムに伸ばされた、銀にも近い白色の髪を持つ彼女の姿は可憐で、どこか雪国の妖精を思わせる。

「「……」」

しかし、そこで俺は気づいた。

少しばかり緊張したように自己紹介する雪縫を、色町はどこか冷めたように、花屋敷はどこか苦笑いのような表情で見守っていたのだ。

そんな二人の含みのある表情に、俺が面食らっていると――三人は改めて俺が横たわるベッドの傍ら、病室の丸椅子の上から、俺を静かに見つめた。

「どうかな？　名前を聞いて、あたしらのこと、何か思い出せそう？」

「……い、いや、全然。申し訳ないんだけど……」

「そっか。――ううん、仕方ないよ。無理に思い出そうとしなくてもいいからね」

そう言って微笑し、俺の布団をぽんぽん叩くのは、ええと……花屋敷だ。

……正直なことを言わせてもらえれば、距離が近かった。彼女からしたら俺は、もう長いこと付き合ってきた幼馴染なのかもしれないが、俺にとっては今さっき出会ったばかりの女の子なのだ。気遣われて嬉しい、という思いよりは、戸惑いの方が先に立つ。

そんな感情が顔に出てしまったのか、雪縫が呟いた。

「花屋敷さん。くーさん、困ってる。あんまり直接的なのはやめるべき」

「あ……ごめんね、くーくん。馴れ馴れしかったよね？」

「い、いや、別にいいんだけどな？　たぶん君にとっては普通のことだったんだろうし」
「うん……普通だったん、だけどな……」
行き場のなくなった右手を小さく握って、自分の背に隠した。――僅かながら、きりりと胃が痛む。こういう時、昔の俺なら、彼女を拒絶しなかったんだろうな。
重苦しい空気を察したのか、ふいに色町が「お花を持ってきたの。花瓶に入れてくるわね」と言って、席を立つ。それから彼女が病室の奥に消えると、水の流れる音がした。
その間、雪縫が場を繋ぐように、口を開いた。
「どの程度覚えてない？」
「正直、事故以前のことは全然。ここが病院で、病気になった人を治療する施設だってこととか――そういった知識としての記憶は、消えてないんだけどな」
「自分にまつわることは？　嫌いだったものとか、好きだったものとか……」
「いや、あんまり……さっき巨乳好きだったことは思い出したけど」
「思い出さなければよかったのに」
不貞腐れた表情の雪縫に睨みつけられる。思い出したものはしょうがないだろ……。
次いで、気持ちを切り替えるように顔を上げた花屋敷も、会話に混ざってきた。
「くーくんはねー、甘い物が大好きだったよ！　放課後、一緒に帰れるときは、よく雪国

大福を二人で一個っつ食べたりしたの。冬でもそうだったんだから」
「へえ、甘い物……そういえば、そんな気も……」
「それから、キャラメルも大好きだったよ。あなたと喧嘩して険悪な空気になったら、次会う時にお互いキャラメルを渡し合うんだー。それでチャラって――そうしてた」
「ふうん、そっか……」
「……えへへ」
俺がピンと来ていない顔をしたら、花屋敷は誤魔化すように笑みを作る。一方の俺は、いまその記憶を思い出さないことで、彼女を傷つけていることに気づいた。
「本当に悪い、花屋敷……さん……」
「花蓮って、そう呼んでくれてたよ？」
「か、花蓮？」
「うん。下の名前で花蓮。――ね、またそう呼んでよ」
屈託のない笑みと共に、花屋敷はそう言った。……中々ハードルの高い注文だった。俺からしたら初対面の女の子を、いきなりそう言うのは……なあ？
「じー」
「他人をじっと見ている時に、実際にそう言う奴を初めて見たぞ……」

「か、れ、ん！　ほら、簡単だよ！　りぴーとあふたーみー！」
「……か、花蓮」
「ふふっ。うんうん、それでよろしい！」
俺が無理して名前を呼ぶと、彼女は満足そうに頷く。……どうにも気恥ずかしかった。
つか、そもそもの話をすれば――俺はいま、彼女を含めた可愛い女の子達に、いきなり囲まれているというこの状況に、戸惑っているしな……なに？　記憶を失くす前の俺って、超モテ男だったの？　さっき鏡で見た俺の顔は、超絶イケメンじゃなかったが……。
そんなことを考えていると、色町が水の入った花瓶と花を持ってきた。花瓶に添えられていたのは、赤、白、紫に彩られた、美しい花の束。どうやらお見舞いの花らしい。
綺麗だなーと見蕩れていたら、それに気づいた色町が微笑と共に告げる。
「アネモネよ。可愛らしいでしょ？」
「あ、ああ。ありがとう」
「アネモネ……？　アネモネって、確か……」
色町の言葉に、考え込むような様子を見せる雪縫。なのでつい気になって雪縫の様子を見ていたら、とんとん、と肩を色町に叩かれた。……こんな些細なことでドキっとする俺は、記憶はないけど、たぶん童貞だった。ちくしょう。

「いつ頃退院できそうなの？　学校には、いつ戻れるのかしら」
「うーん、どうだろ……俺、頭カチ割れた割には、記憶以外の部分はそこそこ無事だったからさ。それこそ、またいつ記憶が飛ぶともわからんけど――早ければ来週には、学校戻れそうなんだよな」
「そう、それはいい報告だわ。くーたんがもうすぐ学校に来てくれるのなら、これからのお昼休みは、私一人で時間を持て余さずに済むわね」
「……それは別に、俺以外の人とメシを食えばいいのでは？」
「だって私、あなた以外には友達いないもの」
「……なんつうか、その……ごめんなさい」
「ふふっ、謝る必要なんかないわ。――ちなみに、くーたんもクラスに私以外の友達はいないわよ？」
「マジで⁉　俺いま今日一番ビックリしてんだけど、マジで⁉」
「ええ、そうよ。――まあ、これから実感することになるでしょうけれどね。こんな大けがをしているのに、私達以外は誰もお見舞いに来てくれない、という事実から」
「……知りたくなかった。俺、そっか……そっか……」
「あははー。でもその代わりに、こんなに可愛い女の子三人が見舞いに来たんだから、い

ーじゃん。くーくんモテモテじゃん」
「確かに。くーさんの悩みは贅沢。こうして女子に囲まれてる時点で、男友達がプッ……いないことなんてプフッ……我慢するべきあーっはっはっはっは！」
「あのー、雪縫さん？　お前、記憶を失くした俺でもわかるくらいキャラにない呵々大笑してんじゃねえよ」
「取り乱すことないわ、くーたん。私がいるもの。私と二人で、傷の舐め合いをしましょうよ、ね？」
「ううう、色町さん……それ、慰めになってるんですかね……」
「具体的には、英語でペアを作る時、私達が男女でペアになる度に――『あいつら付き合ってんじゃねえ？』ってなる冷ややかな視線にも耐え抜きましょうよ」
「俺、記憶喪失とか関係なく、学校行きたくなくなっちゃったよー」
ベッドに身を預けながらつい愚痴る俺。そんな俺の様子を見た女子三人が、視線を交わしながら、少しだけ笑い合っている姿に……俺はなんだか酷い疎外感を味わうのだった。

◆◆◆

それから時間は進み――退院して数日後の、火曜日。

「なんかごめんな、雪縫さん」
「……ううん、いい。構わない。むしろ、私を頼ってくれて嬉しい。――あの淫乱乳だけ女でも、元気が煩い騒音幼馴染でもなく、私を選んだくーさんは見る目がある」
「見舞いにきてくれてた時から気づいてたけど、君って結構毒舌だよな」
「でも、どうして朝の登校に私を選んでくれたの？　あなたにとっては私も、他の二人と同じように、まだ出会ったばかりの他人にしか思えない筈なのに」
「いや、特に理由ってほど理由は……ただ単に、いつも通っていた学校に登校するにも、誰かの案内が必要だって気づいた時に、雪縫さんが見舞いに来てくれたからさ」
「……」
理由はない、とはっきり言ってしまうと、雪縫はわかりやすく不満げに口を尖らせ、俺の腕を制服の上からつねった。地味に、しかし着実に痛い……。
そんな訳で、国道を横目に、てくてく歩道を行く俺達。……車がびゅんびゅん通っている真横を歩いているのに、さほど俺の中で恐怖心が芽生えていないこと、それ自体が怖かった。事故そのものを忘れてるから、車に対する警戒心も生まれてこないんだよな……。
「それじゃあ、気を取り直して――都合のいい女一号、くーさんの登校の手助けを再開する。都合のいい女だから」

「……いや確かに俺が悪いんだけどさ、そういう言い方はちょっと……」
「ちなみに、これは歩道橋って言う。この段差に足をのせて、もう一度のせて、を繰り返すことで、のぼれる。そして道路を横断できる」
「馬鹿にはすんな？　俺が自分の通ってた高校に登校できなくなったからって、馬鹿にはすんなよ」
「たかしくんは右手にりんごを一つ、左手にももう一つりんごを持っていました。さて、たかしくんが持っているりんごの数はいくつですか？」
「だから馬鹿にすんなって。俺、記憶以外は割と無事だから。算数においてたかしくんが出てくる段階は卒業してるから」
「正解はゼロ。何故ならたかしくんは、そのどちらのりんごも友人から持たされているだけで、そのりんごを彼が所有している訳ではないからです」
「なにそれ悲しい。たかしくんパシらされてただけかよ」
　そんなしょーもない話をしながら俺と雪縫は隣り合って進んだ。――ふふっ、と。楽しげな顔で雪縫が笑う。零れたような笑み。白い肌と白い髪に、それはよく映えた。
「……」
　しかし、その笑顔を見ても、俺が何を思い出すこともない。その可愛さに心臓が小さく

ドキリと動いたが、だからといって記憶は蘇ってこなかった。
「……くーさん、大丈夫？　顔色悪いけど……」
「ああ、大丈夫だ。心配してくれてありがとう、雪縫さん」
「……」
「ん、どうした？　急に立ち止まったりなんかして」
「この間から気になってた。雪縫『さん』って……」
「あ……昔の俺はそう言ってなかったか？」
「うん」
「そっか……じゃあ、昔の俺はなんて？」
「しゅきしゅき大しゅき霙たん」
「お前、平気な顔で嘘をつくなよ……」
　ノータイムで、しかも無表情で、霙たん――ではなく雪縫はとんでもない嘘をついてきた。実際、俺がそんな恥ずかしい呼称で彼女を呼んで、雪縫は嬉しいのか……？
　俺がそう呆れていると、彼女は肩を竦めたのち、悪びれる様子もなく話を続けた。
「霙。そう呼び捨ててくれてた。だから、これからもそうして」
　また下の名前か……いや本当、記憶喪失前の俺ってすごいな？　記憶を取り戻してない

からこう思うのかもしれないが、俺、昔の俺に少し腹立ってきたぞ。なんだこのリア充は。友達はいないらしいけど、雪縫に、花蓮に、色町に――仲の良い女の子が多すぎだろ。

そうは思いつつも、俺は一度唾を飲むと、覚悟を決めた。……可愛い女の子に頼まれてしまっては、それを無下にすることもできない。乾いた口から、何とか声を絞り出した。

「み、霙……これでいいか？」

「――――」

しかし、俺がそう言った瞬間、かあっ、とその頬をリンゴのように赤くする雪縫。それから彼女は恥ずかしげに、赤らんだ顔を俯けてしまった。……？　いつも俺にそう呼ばれてるんだとしたら、このリアクションはおかしい気がするけど……。

「お、おい、霙？　どうしたんだよ霙」

「や、やっぱやめて、くーさん……下の名前とか、距離感が近すぎる……無理……」

「はあ？　距離感が近すぎるって……でも俺は昔から、君のことを――あ！」

そこまで言ってようやく気がついた。彼女のこの照れたような様子……もしや！

「さてはお前、俺から霙なんて呼ばれたことなかったな!?」

「……だって、呼ばれたかったんだもん……」

赤らんだ顔を逸らし、頬を膨らませた彼女はそう、ぽしょりと呟いた。うわ、なんだそ

の理由。可愛すぎる――じゃなくて！　確かに、これはちょっと警戒すべき事態だった。

そうか、これまではあまり意識してなかったけど、記憶のある彼女達は、記憶のない俺に対して、こういうことができるのだ……これからは少しばかり、考えないとな。

「と、ともかく。もうこういうことはやめてくれよな、雪縫」

「……霙でも、いいけど」

「さっき『距離感が近すぎる、無理』って言ってたじゃんか」

「実際にそう呼ばれたら、心臓がドキドキし過ぎた……」

「……」

その発言にこそ、俺の心臓がドキドキと高鳴った。いじらしい子だなあ……。

そうして、会話が一段落したところで――俺達は再び、目的地である私立九ノ里高校への道を、歩き出す。

俺が一年と半年ほど通っている筈の、いまは何の思い入れもない学校へと――。

雪縫に連れてきてもらった自分のクラスの前で、俺は立ち尽くしていた。

少しだけ呼吸が荒くなる。そんな時、つんつん、と制服の袖を雪縫に引かれた。

「手、繋ぐ？」

「な、なんでだよ……意味がわからんのだけど」
「だってくーさん、見るからに緊張してるから。……こいつ今なら弱ってるし、手繋げるかなって思った」
「なんでそんな内情までバラすんだお前は」
　というか、そもそもの話をすれば、いま雪縫と手を繋いだところで、俺の緊張はほぐれたりしないんだが……むしろ女の子と手を繋いだドキドキで、緊張が倍になるだけだ。
「ともかく、俺は大丈夫だから。雪縫も、もう自分のクラスに戻っていいぞ。――ここまでの案内、ありがとな」
「うん……」
　俺の制服の袖から手を離し、たたたっと小走りに離れていく雪縫。しかし、彼女はふいにこちらを振り向くと、はっきりとした声で言った。
「――私は、味方だから」
　その言葉がどういう意味なのか、今の俺にはわからなかった。
　だから、それがどういう含みを持っているのか、少し考えようとした。……しかし、考えようとしたところで、そもそも参照するべき過去を持ち合わせていないことに気づいた俺は、仕方なく考えるのを諦めると――一つだけ深呼吸して、教室の扉を開ける。

「「……」」
　降り注ぐ目と目と目。攻撃の匂いは感じない。ただ、腫れ物に触れるかのような、どうしたらいいのかわからないという困惑の瞳が、教室には多くあった。
　そんな中、一人の三つ編みメガネの女子が俺の前まできて、話しかけてきた。
「おはよう、くー助くん。もう学校出て来て大丈夫なの？」
「う、うん。まあ……」
「そっか、よかった。――ほら、ここがあなたの席だよ」
　三つ編みメガネの女の子が、俺を自分の席に案内してくれる。「ありがとう」と告げると、彼女はにっこり笑って自分の席に戻った。――見やれば、俺が入ってきた時だけ静寂に包まれた教室は、またがやがやと喧騒を取り戻している。
　そうして、孤立した状況に不安になっていると――俺の肩をぽんぽんと叩く者があった。
　なんだ、俺にも友人がいたんじゃないかと振り返ったが、そこにいたのは彼女だった。
「おはよう、くーたん」
「あ、ああ……おはよう、色町さん」
　楽しくてしょうがないという表情。「ふふっ」彼女は自然な所作で髪を耳にかけながら、席に座った。――俺の隣。同じクラスなのは聞いてたけど、席もこんなに近かったのか。

「あなたが学校に復帰するのを、待ちわびていたわ」
「お、おう、そっか。ありがとう……ありがとう？」
「具体的には、お昼休みの時間になるといつも女子トイレにこもって、泣きながら焼きそばパンを食べていたわ」
「具体例はいらなかったなあ……」
「少し味付けが濃かったの。あのパン屋ももうダメかしらね」
「たぶんそれパン屋のせいじゃないから、見限んないでやってくれ」
　俺がそう言うとまた笑って、色町は机に肘をつく。それから、さっき俺に話しかけてくれた三つ編みメガネの女の子を小さく指さして、会話を続けた。
「彼女は雛山もえさん。このクラスの委員長で、最近はあなたのことをよく気にかけていたわ。事故以前はごくたまに世間話をする程度の関係だったのにね。――だから、端的に言えば同情なのよ。それまで気にも留めていなかった男子が、大きな不幸に見舞われた。これは委員長として何かしなければ……そういう偽善、もしくはボランティア精神と言ってもいいのかしら」
「……」
「あなたが望むのなら、彼女の机の中にバナナの皮を放り込むくらいの悪事はやってのけ

るけれど？」
「いやなんでだよ。俺そんな顔してた？　俺そんな嫌そうな顔してたのか？」
「ふふっ、冗談よ。でも――つまり彼女は、くーたんの境遇を哀れんで話しかけてきただけなの。残念だけれど友達じゃないのよ」
「……じゃあやっぱり、俺には……」
「このクラスに、私以外の友達はいないわ（にっこり）」
「満面の笑みで言うなよこんちくしょう！」
　つい全力でツッコんでしまう俺。しかし、そんな俺のツッコミにも、色町は涼しい顔。むしろ久しぶりにこうして話せて嬉しいと、そんな喜色を隠さない表情だった。
「つか、そもそもの話なんだけどさ……なんで俺って、色町さん以外にクラスの友達がいないんだ？　コミュ力が死んでるのか？」
「いいえ、そんなことはないわ。――これは昔、くーたんと出会った頃に聞いた話なのだけれど……どうやらくーたんって、入学したての頃に、インフルエンザにかかったらしくてね。それで友達を作るタイミングを逃して、そのままずるずるといっちゃったそうよ。よく事あるごとに、『俺は友達を作れなかったんじゃない。作る機会を得られなかっただけだ。ポテンシャルはあるんだ……』と泣きそうな顔で言い訳をされたわ」

「……わかるぞ俺。そう言いたくなる気持ち、わかるぞ俺！」
「まあそのおかげで、このクラスではこうして、私がくーたんを独り占めできているのだから、御の字よね」
「御の字て。俺に友達がいないことを喜ぶなよ。本当に友達か？」
俺がそう言うと、楽しそうに笑う色町。その良い笑顔をやめてくれ。好きになるから。
それから色町は、俺にこのクラスの面々についての情報を教えてくれた。――キラキラした男女グループがいたり、ひっそりと楽しそうなオタク男子グループがいたり、二軍的な位置につける女子グループがいたり……しかし、そうして様々な名前が彼女の口から出てきはすれど、俺と関係のある人間は一向に増えないのだった。ふええ……（泣き声）。
とまあそんな具合で、彼女は説明をしていってくれたのだが――その際。俺はふと、別のことが気になってしまった。それは、彼女が小さく人を指さす時。制服の袖が引けて、彼女の手首があらわになったのだが……そこに、白い包帯が巻かれていたのだ。
手首に包帯。悪いイメージが浮かぶ。他人事ながらつい心配してしまった。
「――まあ、そんな感じね。以上がこのクラスの人達のおおざっぱな説明になるのだけれど、これで足りたかしら？」
「……ああ、うん。十分だ」

「ん？　ぼーっとどこかを見て、どうしたの……――あ」
ついじろじろと見過ぎてしまったために、俺が見ていたものが色町にバレたらしい。すると彼女は少し恥ずかしげに袖を正して――包帯を隠して、それから言った。
「場所が場所だけに、意味深に思えてしまうかもしれないけれど……これに関してはあまり重たい理由じゃないの。あとで教えてあげるから、そんな顔をしないで、くーたん」
「そ、そうなのか？　なら、いいんだけど……」
「ふふっ、変わらず優しいのね。――こうしてあなたに心配してもらえるのなら、こんな傷でも、つけた甲斐があったのかもしれないわ」
「……」
その発言にどこか病的なものを感じた俺はつい、笑みを浮かべる色町から視線を外した。……昔の俺ならこんな時、どんな返事をしていたのだろうか。まともに口を開けない代わりに、俺はそんなことを考えるのだった。

◆◆◆

昼休みの時間になった。
俺は一つ伸びをして、数学の教科書を机にしまう。――結局、記憶を失った俺にとって

も、高校の授業が新鮮だったのは一、二時間目だけ。だから待望の昼休みだ。
そんな訳で俺は早速、総菜パンの入った学生カバンに手を伸ばしたが――その瞬間。
「はい、くーたん」
どん、と俺の目前に置かれたのは、ピンクの風呂敷に包まれた、大きなお弁当だった。
「……ええと、これは？」
「私の手作りよ」
「……」
彼女と病室で出会ったのが先週の水曜日だから、まだ一週間も経っていない。
たぶん、そういう関係ではあったんだろう。恋人一歩手前というか、もうどっちかが踏み出したらそうなる関係というか……そのレベルではあったんじゃないかと、そうは思うのだが――手作りかー。俺からしたら出会ったばっかの女の子の、手作り弁当かー。
「もしくーたんが嫌だと言うのなら、いまからこの中身は全部、あの教室の隅にあるゴミ箱に捨ててくるけれど」
「……あの、あれだよな。色町さんってたまに、凄いヤンデレっぽい瞬間があるよな」
「ちなみに。さっきはぐらかした、いま私の手首に包帯が巻かれている理由もこれよ。今朝の料理中に、少し切ってしまってね。――紙織、ドジっちゃった。てへぺろ」

わかりやすいドジっ子アピールだった。あざといからやめなさい。
と、そうして俺が面食らっている間にも、色町は勝手に風呂敷包みを開封する。それから弁当の蓋をぱかっと開けた。――なんというか、普通ののり弁だ。ただ右下にごく小さく、桜でんぶで『ＬＯＶＥ』と書かれてはいるが。それから彼女は手慣れた様子で割り箸を割ると、それを俺に渡してきた。……いや、割り箸くらい自分で割れるんだけどな？
「くーたんは記憶喪失になってしまったし、だから私のことも『最近出会った女』程度の認識でしょうから、このタイミングでまた手作り弁当を持ってくるのはどうなのかしらと、そう思いもしたのだけれど――作ってきたわ」
「そこまでわかっていて作ってくるところに、色町さんの性格を垣間見たわ」
「さ、召し上がれ」
「……い、いただきます」
なんというか、感情としてはすごい複雑だった……綺麗な女の子の、手作り弁当。そんなの、高校生男子としては嬉しくない訳がない。ただ、俺に『色町紙織と関係を築いた記憶』がないので、それがどんだけ美人な女の子の手作り弁当だとしても、これは先日見知ったばかりの女の子が作った弁当であり、だからこそ一抹の不安が残る訳で――。
「食べないのかしら？」

「た、食べる！　食べるけど、ちょっと待ってくれ……」
「……ああ！　そうよね、いつもはこうじゃないものね？　ごめんなさい、気が利かなくて。ええと、ちょっと待ってもらえる？　――はい、あーん」
俺が手作り弁当に手をつけられずにいると、色町がいきなり、俺の弁当から自前の箸で玉子焼きをつまんで、俺の口元に寄せてきた。え……一体なんなんでしょうか、これは。
「……あの、色町さん？　俺達っていつも、こんなことを？」
「（にっこり）」
俺の質問に、ただただ美麗な笑みを返す色町。ええええ……こんなんもう、付き合ってますやん。もしかして色町って、俺の彼女なのか？　幼馴染の花蓮がいて、女友達の雪縫がいる俺は、こんな美人と付き合ってんの？　俺スゴない？
そんな思考をしている間にも、俺の眼前には玉子焼きが差し出されたまま。……ここで「記憶喪失の俺にとってあなたはほぼ初対面の女なので、そんなあなたの手作り弁当は食えません」と言えるほど度胸のない俺は、だから……おずおずと、その口を開いた。
「あ、あーん……」
「はい、あーん。――ふふっ、美味しい？」
「ふぁ、ふぁい……」

一応はそう頷いたものの、正直、美人の同級生にあーんで食べさせてもらっている、という状況に頭が茹ってしまい、味なんかろくにわからないのだった。情けねえ。

そうして俺は玉子焼きを嚥下する。とりあえず、弁当の中身を一つ食べたことで安心した俺は、改めて「いただきます」と言うと、色町の手作り弁当を食べ始めた。

ちなみに、味は普通に美味しい。どうやら色町は料理をするのが得意らしかった。

「いつも、昼メシはこんな感じで？」

「ええ、そうね。教室で二人、席を並べて食べることが多かったわ。最初はそれぞれ自分で買ってきたものを。それから、二人で学食を食べに行ったり、たまに気分転換で屋上に出たりもしたわね。最近では、私がお弁当を作ってくるのが日課だったの」

「ふうん……その中で、あ、あーんをして食べさせあったりとかも、してたんだな？」

「ああ、それは今日初めてしたわ」

「おい！　どういうことだおい！」

「私としてはずっと、やりたいと思ってはいたのだけれどね。くーたんが恥ずかしがるものだから、今までできていなくて……ふふっ、積年の夢が叶ったわ。いま私、とっても幸せよ。ありがとう、くーたん」

「あ、ありがとうて……記憶喪失の俺を騙してあーんで食べさせたっていうのに、全く悪

びれてないのが、逆に凄いな……」

「それじゃあ次は、私にあーんをしてくれるかしら？」

「ちょっとくらい反省したらどうですか!?」

俺がそうツッコんでも、どこ吹く風。色町は上機嫌そうな顔で、自身の弁当をパクつくだけだった。ちくしょう。雪縫のことがあって、気を付けようと思っていた矢先に……。

「こうなると、色町さんと一緒にお昼を食べていたかどうかも怪しいな……」

「ふふっ、ごめんなさいね。でも……あなたは忘れてしまったのでしょうけれど、くーたんがこうして、私とお昼を食べてくれるようになって――正直、救われたのよ。あなたみたいな純粋な人は、私の人生にはいなかったから。くーたんが、二人で食べるご飯のおいしさを、教えてくれたの」

それはちょっと大げさじゃないか、と。そう言おうとしたが、それはできなかった。

――酷い頭痛。頭蓋骨にドリルで穴を開けられる感触。みしり、と骨が呻いた。

「ぐ、づ……！」

「ど、どうしたのくーたん!?　大丈夫!?」

しかし、その痛みは一瞬のもので。そうして苦痛を耐えきったその先に、俺の見たことのない景色が。失われた筈の記憶が、輝いていた――。

「よ、よう。お、お昼、一緒に食べないか？」
「……どうして？」
ぎこちない笑みを浮かべる彼に、怪訝そうな顔で色町が尋ね返した。その表情に少したじろいだものの、笑顔を切らさずに彼は続けた。
「あーっと……一人より二人の方が、美味しいだろ？」
「ふっ。面白いことを言うのね」
「む……その冷めた態度、なんか嫌だな。もしかして色町って、他人と一緒にご飯食べたこと、ないんじゃないのか？」
「ええ、ほとんど。でもそれを言ったら、くー助くんもそうなんじゃない？」
「ぐっ、痛いところを……で、でも、俺はあれだから！　花蓮とはちょくちょく一緒に食べてるからな！　他人と食べたこと、なくはないぞ！」
「ふうん……それって、そんなに違うものなのかしら」
「じゃあ、試してみないか？」
そう言うと、彼は彼女の対面の椅子に座り、「いただきます」と手を合わせる。それから持参していた焼きそばパンの包みを開け、齧りついた。

「んまい！」
「……」
「ほら、色町も。一緒に食べようぜ」
言われて、おずおずと自分の学生カバンからメロンパンを取り出す色町。彼女はその包みを開け、ぱくり、と小さく一口齧った。それから、彼に向かって不満げな顔をする。
「……変わらないじゃない」
「馬鹿かお前。そんなすぐに変わる訳ないだろ」
「……」
「やめてやめて暴力反対。その握り込んだ拳をおろせって。お前、暴力とか振るえるタイプじゃないだろ」
馬鹿らしくなって拳をおろし、色町はまた一口メロンパンを齧る。やはりその味は変わらないとでも言いたげな、不満顔だ。
「嘘をついたのね」
「嘘じゃないって。ただ、誤解があったみたいだな」
「誤解？」
「うん。一人より二人の方が美味しい、これは嘘じゃない。でも別に俺達は、そんなすげ

え仲いいって訳でもないだろ？　だから、たぶんこれからだよ。――一緒に食べようって誘ったのは、そういうこと。いつかきっと美味しくなるから、これから昼食は二人で食べようぜって……あの、意味わかる？」

「……ぷっ」

色町は小さく噴き出した。それは、彼が最後に酷く不安げな、自分が何を言っているのか自分でもわからなくなってしまったような表情で、色町を見てきたから。

それから、彼女は小さくメロンパンを齧った。それは少しだけ、違う気がした。

「意味がわからないわ。でも、まあ……明日も、一緒に食べましょうか」

それが、色町が初めて彼にねだった、小さな約束事だった――。

「思い、出した……」

「え？」

俺は目を数度しばたたかせ、顔を手で拭った。それから、さっき見た光景をもう一度、頭の中で反芻させる……細部は失ってしまった。あの時抱いた感情、俺がどういう気持ちだったのか、そういうものは。

でも、思い出せたのだ。

たぶんあれは、俺が初めて色町をお昼に誘った日のこと。――俺から誘っていた。色町は少し困り顔だった。でも最後には、俺との昼食を受け入れてくれた。だから今日まで、この関係が続いている……。

「――そう、か」

何もないと思っていた自分にも、ちゃんと関係を紡いだ人がいた。それを感じられたことが嬉しくて、俺は勢い、席から立ち上がる。それから色町のそばまで近づくと、つい。

感情の赴くまま、色町を背後から抱きしめてしまった。

「そうかそうか。そうだったのか――色町っ！」

「え――やっ!?　く、くーたん!?　きゅ、急にどうしたのあなた！　いきなりバックハグなんて、どこぞの少女漫画みたいでこんなのはもちろん嬉しいけれどただ強すぎる刺激は同時に毒にもなってでも死ぬほど嬉しいはううぅぅぅん……！」

胸中を喜びの感情が駆ける。やった、俺は思い出せる！　記憶を取り戻せるんだ！

そうして、色町を抱きしめる事、しばし……抱きしめた体が熱くなっていくのに比例して、次第に俺の頭が冷静になっていく。そのうち、教室にいる生徒たちの冷たい視線が、こちらに刺さっていることにも気づいて――う、うわ！　俺、何やってんだ!?

頬が赤らむのを感じつつ、彼女から飛びのいた。すぐさま色町に頭を下げる。

「ご、ごめん色町さん！　記憶喪失になってから、俺ってなんにもねーんだなって自暴自棄になってたから……いまお前との過去の記憶を思い出して、嬉しくなっちゃって……」
「そ、そう……いえ、その、いいのよ？　こんな体で良かったら、いつでも抱きしめてくれて。眠れない夜には、呼んでくれればいつでも抱き枕になるもの」
「色町さんって、平然とした顔ですごいことを言うよな……」
「え、ええと、それで――何を思い出したの？」
色町に尋ねられ、俺は今しがた自分の身に起こったことを説明した。――断片的ではあったけど、記憶の一つを取り返せた。そう伝えると、色町は何故か儚げな顔をする。
「そう……それはいいことね。くーたんが苦しむのは見たくないけれど、記憶を取り戻せたのなら僥倖だわ」
「……なんか、あまり喜んでくれないんだな？」
「い、いえ、そういう訳じゃないのよ？　あなたが私のことを思い出してくれたのは嬉しいけれど、でも、その前のくーたんの苦しみようが酷かったから……」
「ああ、そっか。心配かけてごめんな」
「……」
俺がそう言うと、何か考え込むような顔をする色町。……それを不思議に思いつつも、

俺は疑問に感じたことを、彼女に投げかけた。
「でもなんで俺、それまでは友達のいないぼっちだったのに、色町さんにはあんなに積極的に話しかけたんだろうな？」
「さあ？　それはくーたんにしかわからないことだから、私からこれといった答えをあげることはできないけれど……たぶん、私もぼっちだったからじゃないかしら？」
「あー。だからこそ、話しかけやすかったのかね？」
「そのおかげでくーたんが話しかけてくれたのなら、私もクラスに友達を作らないでよかったわ。――安心してくーたん。これからも、私の友達はあなただけよ」
「……あの、言葉がいちいち重いのですが」
つい苦み走った顔になる俺。それに笑いつつ、色町はまた箸を持つ。次の一口を食べようとして――一度止まり、それから箸を置いた。小さく深呼吸。……色町の雰囲気がどこかおかしいことに気づいた俺が彼女を見ていると、彼女は俺を見つめながら、言った。
「でも、その……くーたんが喜んでいるところに水を差すみたいで、申し訳ないのだけれど……あんまり、無理に記憶を追いかけなくてもいいんじゃない？」
俺はその言葉に、少し驚いた。だって俺はてっきり、色町は俺に、早く記憶を思い出して欲しい――自分達の関係性を取り戻して欲しいと、そう望むと思っていたから。

苦し気な、儚げな笑みを顔に張り付けて、なおも色町は続けた。
「頭痛のこともあるし、ね？　過去にどういうことがあったかは、私が教えてあげるから。そんなに、必死にならなくても……」
「ん……まあ、うん。そうかもな」
「ええ。――それじゃあ、食べましょうか」
そう言って色町は、途中になっていた弁当に再度取り掛かる。……言葉だけ見れば、俺の頭痛を慮ってくれたが故に、俺を止めたようにも思えるが――当然、それ以外の含みを感じ取れないほど、俺は鈍感にはなれないのだった。

◆◆◆

たった一つだけど、記憶の欠片を取り戻した。
その事実は俺の心を軽くし、そして同時に――一つ取り戻せたのだから、二つ三つと、もっと多くの欠片を取り戻したいという欲求を、俺に抱かせた。
そんな訳で俺は、放課後。何故かそそくさと先に帰ってしまった色町のことは諦めて、お見舞いに来てくれた三人のうち、残りの二人を探して学校をさ迷っていた。
そうして見つけたのは、花屋敷花蓮。俺の幼馴染だと名乗った少女だ。

彼女は校庭で気炎を上げながら、部活に精を出していた。女子サッカー部。仲間と共にフィールドを走るその姿は躍動感に溢れており、見ていて楽しかった。
そうして、俺がその姿を校庭の端で眺めていたら、どうやら部活が終わったらしい。女子サッカー部の面々は一度部室に戻り、制服に着替えて出てくる。その中には花蓮もいて、彼女は部活仲間のみんなと楽しそうにお喋りをしながら、こっちに歩いて来た。
「ねーみんな。今週の日曜、ウチで山風のライブ見ない？　私が大好きないちみーのキレキレダンス、みんなも見たいっしょ？　花蓮はどうよ？」
「えー、別にいいよー。この間、みんなでリンリン家に泊まった時に、いちみーのドラマ一気見したし、もうお腹いっぱいだよ」
「は？　ドラマとライブは別なんですけど？　いちみーの演技力を堪能するドラマと、いちみーのダンスのキレを堪能するライブは別腹なんですけど？　は？」
「リンリンって、山風のことになるとキャラが変わり過ぎじゃない？」
「あははー。……というかみんな、ちょっといいかな？　あの――」
花蓮はそう前置きをすると、部活仲間達に何事かを小声で話した。すると、彼女達は一斉に「おい！　こいつ、友情より男を取る気だぞ！」「あはは、私は応援してるから。ガンバ！」「あんな男友達のいない男の、どこがいいんだか」と騒ぎ出した。というか、一

人だけなんか酷いこと言ってる子がいない？　ねえ、俺の勘違い？
　そうして、小突かれ小突かれしながら、その輪から外れる花蓮。次いで、彼女は俺に向かって手を挙げると「おっす、くーくん！　一緒に帰ろうよー！」と声を出した。……その気安さにややたじろいだが、俺が「いいぞー」と返事をすると、彼女はにかっと笑ったのち、俺の隣まで駆け足でやってくる。彼女は笑顔と共に言った。
「よっし。それじゃあ行こっか」
「おお。……そんなに急いでくれなくても良かったんだけどな？」
「えへへー。早く、くーくんのそばまで行きたかったから」
「……そ、そっか……」
　その言葉にたじろぐ俺。しかし、花蓮の方はそんな俺を気にした風もなく、スキップをしながら校門を出る。「くーくんっと下校！　くーくんっと下校！」――なんだか妙にハイテンションだった。それに疑問を覚えた俺は、つい彼女に質問する。
「下校してるだけなのに、なんでそんなハイテンションなんだ？」
「そんなの、くーくんと一緒だからに決まってるよー！　だってあたし、くーくんが二度と目覚めないかもって聞いた時、わんわん泣いたんだから！　だから、こうしてまた一緒に下校できるのが、本当に嬉しいんだよ。――生きていてくれて、ありがとね」

「……ええと……どういたしまして、でいいのか？」
「あははっ。うん、それでいーんじゃないかな」
　花蓮はそう言いながら、にぱっ、と。人好きのする笑顔を俺に向けてくれた。……僅かに鼓動が速くなる。まだ彼女とのことを何も思い出していないのに、彼女と自分の関係がどういうものだったのか、その笑顔で何となくわかった気になってしまった。
　そうして、俺と花蓮は隣り合って、道路脇を歩き始めた。……いま気づいたが、花蓮が率先して車道側を歩いてくれている。それはどこか、俺がまたふらふらと車道に飛び出してしまうことを警戒している風でもあった。
「そういえばくーくん。さっきあたし達の部活、見てくれてた？」
「ああ、うん。ちょっとだけど見てたぞ。――頑張ってたな」
「えー、そうかなー？　あたしとしては、もっともっと気合入れて練習したかったんだけどね。今の時期は、日が落ちる頃には解散しなきゃいけないからなー」
「大会とか近いのか？」
「ん？　ううん、そういう訳じゃないんだけどね。そうじゃなくて――あたしがドMなだけだから」
「ああ、そうか。花蓮がドMなだけ……は？」

花蓮があまりにも普通のトーンで言うので、聞き流しそうになったが……いまさりげなく、結構なカミングアウトをされたよな？　そう思った俺はつい、隣を歩く彼女を見やる。すると花蓮は、あ、しまった、と。わかりやすくそう思っている顔をしていた。

「そうだ……くーくん、記憶を失くしてるんだもんね？　あたしがMなこととか、知らなかったんだ。うわあ、ミスったー！」

「な、なんだ？　花蓮って、Mなのか？」

「……う、うん！　服のサイズがね！」

「それはさすがに無理があるだろ」

俺がそうツッコむと、花蓮は弱ったような顔になって、「ううう……なんで自分から言っちゃったんだろ」と呟いた。それから、しばらくして。彼女は観念したように続けた。

「じ、実はあたし、マゾっけ、っていうのかな？　そういうのがあるみたいでね……マラソンをクッタクタになるまで走って、走って、走り続けて……最後にはもう脱水症状を起こしながらゴールに辿り着く、みたいなのが大好きなんだよね、あははー！」

「……」

「だ、だから話したくなかったのにぃ！」

つい俺が何の返事もできずにいると、花蓮は目に涙を浮かべながらそう言った。……い、

いや、別に引いた訳じゃないんだけどな？　ただ、戸惑っているのは事実だった。

「つまり、さっきあたしが言いたかったのはね……もっともっとサッカー部できつい練習をして、Mとしての自分を追い込みたい、ってことだったんだよ。うちの部活って、全国を目指してる強豪ほどは厳しくないからね。あたしとしては、S度が足りないんだー」

「S度が足りないってなんだ……お前、あんなに爽やかな汗を流してたのに、内心ではそんなことを考えながら部活してたのか？」

「い、いつもそんなこと考えてる訳じゃないよ？　たまにだよ！」

「お手本のようなボケをするなよ」

「ボケじゃないよ、マジだよ！　……あ、あたしだって別に、Mだからサッカーやってる訳じゃないもん。もちろんサッカーが好きだから、サッカー部に入ったんだよ。……そのついでに、性癖も満たしたいって思っちゃダメなの!?」

「名言過ぎて正論に聞こえるから不思議だ……」

話を聞き始めた当初は、なんてけしからんことを考えるんだ、と思った俺だったが……確かに。花蓮は誰に迷惑をかけている訳でもないので、自身のM的欲求を部活で満たすのも、それは別に悪いことではないのかも――そう俺が思っていると、彼女は言った。

「た、確かに、あたしのMを満たすために、サッカー部でキャプテンになって、自主練の

時は部員から文句がいっぱい出るくらい、きついメニューを組んだりしてるけど……それだって、みんなの為を思ってであって、あたしの性癖のためだけじゃないもんっ！」

「誰かこのキャプテンをクビにしろ！」

公私混同もいいところだった。自分がきつい思いをしたいがために、部員にもきつい思いをさせるって、とんだMである。もうこれ、SなのかMなのかわかんねえな……。

「というか、花蓮？　さっきからお前がMだって話しかしてないけど、あの……一応俺さ、花蓮としたい話があって、部活終わるの待ってたんだけど……話、変えていいか？」

「う、うん、もちろん！　変えていいよ！」

「花蓮としてはたぶん、もっと俺にMだってことをなじられたいだろうから、話題は変えて欲しくないんだろうけど……」

「な――あたしのことをなんだと思ってるのさくーくんは⁉　そんな風に思う訳ないでしょ⁉　確かにあたしはMだけど、あたしが嬉しいのは、体が痛かったりきつかったりする時だけだよ！　勘違いしないでよねっ！」

なるほど。花蓮ってMはMでも、肉体的に責められるのが好きなMで、精神的に追い込まれるのを快楽としないMなのか――俺は何を真剣に思案してるんだよ。

とりあえず、花蓮から話題を変える許可は貰ったので……だから俺は、そもそも彼女に

話したかったことを切り出した。

「実は今日、色町さんと話してる時に、少しだけ記憶を取り戻したんだ」

「え――本当？　よかったね！」

「ああ。……ただ、取り戻したと言っても本当に少しで、あいつと出会った頃の出来事を一部だけ、だったんだけどな」

「そっか。……でもまあ、大丈夫！　みんなとの記憶をなかなか思い出せなくても、思い出ならまた、積み重ねていけばいいんだよ！　焦る必要はないからね！」

「……」

色町もそうだったけど、どうにも俺の周りにいる女の子は、俺が過去を取り戻すことに対して積極的じゃないような……俺はそう思いつつ、話を続けた。

「そんな訳で。だから今日花蓮には、俺が記憶を取り戻せるように、何か俺の記憶の琴線に触れるような話をして欲しいんだけど……」

「きんせん？　ってなに？　お金のこと？」

「それは金銭だな。……」

「ちょ、ちょっと待ってくーくん！　違うんだよ！　確かにあたしはその、頭が良くないというか、若干おバカな部分もあるけど！　それはあたしの、ええと……ほ、ほん……本

物じゃないっていうか……ええと、なんだっけ。似た意味の……ほん……なんだっけ？」
「……本質って言いたいのか？」
「そう、それ！　それはあたしの、本質じゃないんだよ！」
「……」
「本質じゃないのにぃ！」
俺がついアホの子を見る目で花蓮を見てしまったら、彼女はそう叫んで空を仰ぎ見た。テンションが話しやすいし、だから一緒にいて楽しい女の子なんだけど、アホなのはそうだと思った。――とりあえず、俺は話の本筋を元あった場所に戻して、続けた。
「今日、色町さんと話をしていたら、キーワードっていうのかな……何か脳の刺激になる言葉があったらしくて。俺はそれをきっかけに、色町さんとの記憶を取り戻したんだ。だから、その……花蓮にも何かそういう、俺とお前が過ごした過去の情景を思い出すきっかけになるような言葉を、言って欲しいというか……もしくは、むかし俺達がしてたようなことを、再現して欲しいんだけど……」
「再現？　つまり、いつも通りにすればいいってことかな？」
花蓮はあまりよくわかっていないようだったけど、それはその通りだったので、俺は首を一つ縦に振った。すると、彼女は悪戯っぽい笑みを浮かべたのち――ぎゅっ、と。俺の

左手に、自身の右手を絡ませてきた。
「な……お、おい!?」
それに驚き、つい声を出してしまう。昔の俺はどうだか知らないけど、今の俺には女の子と手を繋いだ記憶なんか一つもないのだ。なので俺は焦りから、つい彼女の手を振り払おうとしたが――握られた左手は、強く繋がれたままだった。
そうして、隣に立つ彼女が、俺に微笑を向けながら言った。
「あったかいね」
「い、いや、確かにそうだけど――っつ」
――刹那、鈍痛が後頭部に振り下ろされた。
世界が暗転する。目を閉じたことに俺自身が気づいていない。そうして暗くなった世界に見えた一つの光明。それこそが、俺の失っていた記憶の欠片だった――。

「うー、さむいよー」
「うるさい、ぴーぴー騒ぐな。……そういや、筋肉って冷えやすいって言うし、女の割に筋肉つけ過ぎだから寒いんじゃないのか?」
「むー。くーくん酷い！　あたしはくーくんが『運動のできる女の子が好き』って言った

から、運動頑張ったのに！」
「お前それよく言うけど、ただ単にお前が運動好きで、勉強嫌いだっただけだろ。俺の過去の発言を、花蓮がバカになったことの理由付けにするなよ」
「うるさいうるさい！　くーくんがあたしをバカにしたんだ！　責任取れー！」
「あははは っ」
花蓮が彼に殴り掛かる。しかし彼は抵抗しない。されるがままにされてやる。
それが二人のコミュニケーションだった。からかって、笑って、それが心地いい。
「寒いんなら、手、繋ぐか」
「うん」
そうして二人は手を絡ませ合った。それは二人の普段からのスキンシップで、何らかの感情も乗らない筈だが――この時、彼女は。それとも彼は、どう思っていたのだろうか。
「なんというか、俺達も変わんないよな……俺達はいつまで、こうして腐れ縁をやってればいいんかね?」
「む、なにその言い方！　それだと、あたしと幼馴染なのが嫌みたいじゃん！　本当は嬉しいくせに！」
「別に?　お前と幼馴染じゃなくても?　さして支障はないっていうか?」

「あたし以外、ろくに友達いないくせに！」
「おい、親しき仲にも礼儀あれよ。――というか、あれだから。俺、入学当初はマジでボッチだったけど、いまはクラスに一人、友達いるからな？」
「色町さんだっけ？　……どうかなあ？　もしかしたらその子も、くーくんが友達と思ってるだけで、その子からしたらくーくんは友達じゃないのかもしれないよっ？」
「おま、そんな訳……あるはず……」
「……あの、ツッコミもできないぐらい凹ませてごめんね？　よしよし、良い子良い子」
「おい、頭撫でんなや……」
「大丈夫だよ、くーくん。あたしだけはずっと、くーくんの幼馴染だから」
「いや、照れることも言うなよ……」
「あははっ」
二人はそんな会話をしながら、雪道を行く。確かに繋がれた左手と右手。それは離れないまま、小さな温度をそこに保っていた。
「……というか、今度手袋持ってきてやろうか？　俺はいらないから」
「ううん。あたしも、いらないかな」

「――記憶、戻ったの？」
鈍い頭痛と記憶の奪回を終え、目を見開いたら――酷く真剣な表情を浮かべた、花蓮の顔が真正面にあった。俺は「うお!?」と叫んで、あとじさってしまう。
「あ。ごめんねくーくん。顔、近かったね？」
「い、いや。それはいいんだけど……」
「それで？　記憶は、どうなのかな？」
腕を強く掴まれる。服の上からでも激しい力がこもっているのがわかった。……俺はそれを努めて気にしないようにしつつ、いま思い出した記憶を簡潔に告げる。
「ああ……時系列はわかんないんだけど、なんか俺と花蓮が、二人で雪道を歩いてた。そんで仲良さげに、手を繋いで……」
「――そっか」
ほう、と一つ息を吐く花蓮。彼女はそれから、いきなり俺を抱き締める。「な――」優しい、けれど縋るような抱擁。当然面食らったし、女の子との触れ合いに慣れていない俺の心臓もやかましく騒ぎだしたが、そんな俺のことはおかまいなしといった様子で（あえて無視してるようにも思えた）彼女はそれから、耳元で囁いた。
「思い出してくれたんだね、くーくん」

「あ、ああ……仲、良かったんだな」
「そうだよ。あたしとくーくんは昔からの幼馴染。四六時中一緒って訳にもいかなかったけど、あたしは。くーくんのこと、あたしの半分だと思ってた」
「……」
「好き、嫌いじゃないの。一番、大切だったんだよ」
俺はそんな言葉を聞きながら、下に落ちていた自身の両腕を上げようとした――抱き締め返そうとした。今ならできる気はする。彼女と俺に関係があると、わかったのだから。
でも、そうはしなかった。
それは、いまの俺の思いと彼女が積んできた思いが、釣り合っていないとわかっていたからだ。この手で抱き締め返せるほど、俺はまだこの子を理解していない。
だから、俺の返事は不格好だった。
「ありがとう、花蓮」
「……えへへ。じゃ、帰ろうか」
抱き締めていた俺からそっと離れて、また歩き出す花蓮。俺はそんな彼女に追い付くと、また二人並んで歩き始めた。……それは、先ほど見た記憶と、よく似た光景で――俺はなんだか驚くほど穏やかな気持ちになりながら、彼女と帰路を歩いていくのだった。

◆◆◆

翌日の放課後。俺は色町の「一緒に帰らない？」という提案を謝罪と共に断ると、一人で校舎をぶらぶらしていた。――彼女を、探していたためだ。
「あの子がどのクラスなのか、聞いときゃよかったな……」
色町はクラスの仲の良い女子。花蓮は昔からの幼馴染――一応の裏付けは取れた。だから今度は、あの白い少女に関する記憶を取り戻すために、俺は彼女を探していた。
そうして探し歩くこと十数分。中々見つからなかったのでもう下校してしまったのかと半ば諦めかけていたが、なんのことはない。俺のクラスがある階の廊下に、彼女はいた。
「あ……くーさん」
雪縫霙。俺の病室に見舞いに来てくれた、三人の女の子のうちの一人。
彼女の白い髪、透き通るような肌を、窓から注ぐ斜陽が薄いオレンジに染めていた。俺はぎこちなく手を挙げると、彼女のそばに寄る。
「よ、よお。ここで何してるんだ？」
「……別に、何も」
「？？？　何もってことはないだろ。なんかこの階に用があったんじゃないのか？」

「ない。うるさい」
雪縫はそう言ってそっぽを向く。逸らされた顔は見えなかったが、彼女の白い耳は少しだけ朱色に染まっていた。……？　何を照れることがあるんだろうか。
「まあでも、用がないならちょうどいいか……少し話さないか？」
「……別に？　くーさんがそうして欲しいなら？　構わない」
「オッケーってことでいいな？」
なんだかめんどくさい空気を感じたので、俺はそう言った。次いで「じゃあ、どっかに座ろうか」と、近くにあった自身のクラスの扉を開ける。――人気はもうない。みんな部活やら帰宅やらで、出払ってしまったらしい。
俺に続いて、おずおずと教室に入ってくる雪縫。彼女は静かな、でも確かな足取りで教室を闊歩すると、迷わず俺の席に座った。……何故俺の席に。
俺はそう不思議に思いつつも、彼女の隣の席――色町の席に座った。それから、手早く本題へ入る。具体的には、昨日花蓮にしたような話を、雪縫にもした。『記憶を取り戻したいから協力してくれ』――そんなようなことだ。
「そう。それじゃあ、協力する」
「……なんというか、怖いくらいあっさりだな」

「他の二人は、協力してくれなかった？」
「いや、協力はしてくれた。してくれたんだが……」
「含みがあった？」
「――それ。その言葉が正しい」
できることなら、思い出さなくていい。
俺に対する二人のありようには、それがあった。それに対して雪縫は、そういう含みが全くないというか、すごくフラットに快諾してくれた感があったのだ。
そんなことを考えた俺はその流れで、ふと気になったことを尋ねた。
「というか、俺と君たちの関係はなんとなく見えてきたんだけど……君たち三人の関係って、どうなってんの？」
「見て、くーさん。夕日が綺麗」
「誤魔化すの下手か」
「……別に、話せないことじゃない。簡単に言うと、私達は友達じゃない。それだけ」
「え、そうなのか？　じゃあなんで三人は最初、一緒にお見舞いに来てくれたんだ？」
「あれはバッティングしただけ。くーさんが生死をさ迷っていて、それから面会できるようになったから、待っていた私達が一斉に入っていった。――状況を考えればわかる。

少しは自分で考えて」

「……」

「……え、ええと、その、言い過ぎた？　き、嫌いにならないでくれると、嬉しい……」

「いや、毒舌するならするで、メンタリティを鍛えてくれよ」

というか、そうじゃないのだ。いま俺が押し黙ったのは、考え事をしたからだ。

三人の関係。雪縫が言うには、別段仲が良い訳ではないらしい。それは俺が学校に復帰してから、薄々わかり始めていたことだが――じゃあなんであの時、あの三人の間には、仲が良くないことを気取らせない空気があったのだろうか。

「つか、話を逸らして悪かった。――そんな訳で、俺の記憶を取り戻すために、俺と君とでいつもしていたこと、していた会話とかを、教えてくれないか？」

「していたこと、していた会話……うーん」

話を戻した俺の質問に、雪縫は首を傾げる。自分の中にある俺との思い出を検索しているのかと、思いきや――。

「ぐう……」

「そんな一瞬で寝るなよ。の〇太くんかお前は」

「別に、くーさんとしていた会話って言っても……いまみたいに、その時その時あること

を、適当に話してただけだから……」

「例えばでいいから。何かないか？」

「……貧乳って、最高だよなって」

「よし。俺もう帰るな？」

記憶の復元に協力してくれるのかと思いきや、真面目にやる気がない雪縫を諦め、俺は席を立つ。すると雪縫は「ま、待って」と言いながら、俺の制服の袖を引いた。

「確かに、いまのは嘘。くーさんは……くっ……巨乳が……ぐうっ……好き……」

「そんな白旗を掲げる直前の将軍みたいな顔をするなよ……」

俺が呆れ顔でそうツッコむと、彼女は一つ嘆息してから続けた。

「ともかく。いつもくーさんとしていた会話は、こんな感じで酷く生産性がないものだった。だから記憶を取り戻すトリガーにはならないと思う」

「んー、そうか？」

でも別に、色町と花蓮の記憶を取り戻した時も、生産性のある会話をしていた訳じゃないんだけどな……そう納得しかねるものがあったが、しかし、雪縫が乗り気でないのならアプローチを変えるしかなかった。

「じゃあ、雪縫がいつも俺としていたことってなんだ？　色町さんで言ったら、一緒に昼

食を食べてた。花蓮で言ったら、一緒に下校って感じだった。――お前は？」
「わ、私は、その……」
「その？」
「あの、ええと……絵を……」
「絵を？」
「――やっぱなんでもない」
なんだそりゃ、と椅子から転げ落ちそうになった。どうして過去に俺としていたことを、記憶喪失になったいま、俺に伝えられないんだ。
さっきは記憶を取り戻す手伝いをしてくれると、快くオッケーしてくれたのに。
「はあ……」
二人のため息が重なる。どうして雪縫もため息を吐くんだと問いただしたくなった。
「ごめん、くーさん。私、やっぱりまだ、私と一緒にいた時の記憶を失っているあなたとする会話に、違和感というか、難しさを感じてるみたい。上手く喋れてない」
「そっか……」
「こう見えて私、ちょっとコミュニケーションが苦手だから」
「どう見てもそうだけど……」

「でも、クラスに同性の友達はいる。くーさんほど酷くない」
「なんで立場的優位に立とうとするんだ。やめろ、心痛くなるだろ」
「……一つだけ、言っておくと。私は本当に、くーさんの味方。他の二人は知らないけど、私はくーさんのこと、純粋に――――なんでもない」
「さっきから肝心なところで言葉にならないな……」
俺がそうツッコんでも、どこか上の空。赤らんだ顔を俯けて、「むしろ、いまのは喋り過ぎ……」と小さく漏らしていた。
というか、また気になるワードが再出したな。『味方』――確かこの間も、彼女はそんなことを言っていたが……ということは俺には、他に『敵』でもいるんだろうか。
俺がそんなことを考えていると、ふいに雪縫は顔を上げて、俺を見つめた。頬を赤らめたまま、真剣な表情を浮かべる。
「ね、ねえ、くーさん。くーさんはいま、スマホって持ってる？」
「いや、あの事故の時に壊れたらしくて……だから持ってないな」
「そ、そう……じゃあ、いま約束したい」
「約束って、何を？」
「今度の日曜日……で、でででで――」

そうして彼女は、口を数度ぱくぱくさせたのち、言い放った。
「デ〇デ大王って、スマ〇ラで使う人が使ったら強い。そう思わない？」
「急に何の話だ」
俺がそう言うと同時、雪縫は俺の机に額をごん、ごんと当てる。おいおい、自傷行為やめなさい！　なんで急にそんなことになったんだ!?
再度顔を上げ、俺を見つめる雪縫。今度は頬だけでなくおでこまで赤くなった彼女はそれから、一度大きく深呼吸すると、少し前の言葉からやり直す。
「こ、今度の日曜日……で、でででで、でででででで――」
そうして彼女は、口を数度ぱくぱくさせたのち、今度こそ言い放った。
「デデデデートを、ししししませんか？」
「――――」
心臓が高鳴った。雪縫とデート。彼女からのそのお誘いに、思わず心躍ったのだ。記憶は失われていても、雪縫巽は可愛らしい女の子で。だからまず、嬉しいが先に来た。
ただ、少し冷静になって考えてみる――そうすると、困った、という感情もあった。
いま俺は、記憶を取り戻した色町にも、花蓮にもどこか、警戒心を抱いている。どうやら昔は仲が良かったようだが、それでも――いまの俺には、関係の薄い他人なのだ。だから、あの二人から誘われても困るのに、記憶を一つも思い出していない雪縫と、か……。

そう思ったことが顔に出たのだろう。雪縫は不安そうな顔で、視線を泳がせた。
「いまのくーさんが私のことを嫌いなのは、わかってる……けど」
「いや、嫌いとかじゃなくてな……わかんない、ってのが大きいんだ」
「だ、だったら！　わ、私、昔くーさんに連れて行ってもらったデートコース、案内する！　日曜に！　だから、その……だめ？」
「……」
彼女は何気なく言ったのかもしれないが、それは俺にとって魅力的な話だった。
昔行ったデートコース。そこを巡れば何か、雪縫との思い出も拾えるかもしれない。そしてそれは俺にとって、とても大事なことだった。
今の俺はまるで、透明人間みたいなものなのだ。足がない、顔がない、手がない――心臓がない。記憶が全部なくなって、まっさらの状態で放り出されて、ただ……何とか生活をやっていけるだけの知識はあって。――でも、足りない。誰と繋がっていたのか、どんな思い出を持っていたのか。それがいま、喉から手が出るほど欲しいんだ。俺という人間がどういう形でできていたのか、思い出したい。生身の人間に戻りたい。
そう思っている俺はだから、自然とそう返事をしていた。

「わかった。じゃあ、デートしよう」
「――――」
俺がそう言った瞬間、ぱあっと雪縫の顔が華やいだ。こんな顔もできるのかと面食らったが、彼女はそれから、幾度か自身の頬を両手で軽く叩いて――その笑顔を微笑に変えると、目じりに涙を溜めながら、小さく呟いた。
「ありがとう、くーさん……」
「い、いや、そんな……」
正直、くらくらした。そういう微笑だった。……一体昔の俺は、こんな彼女をどうやってデートに連れ出すことができたのか。俺はそんなことを、俺と再びデートに行けて舞い上がっている少女の、零れるような笑みを見ながら、つい考えてしまうのだった。

◆◆◆

その夜。俺は一人、俺が事故にあった現場に来ていた。
「……ほう」
小さく息を吐くと、白い煙が虚空に現れ、闇に消えていく。随分と寒い夜だった。
――入院している間に一度、警察が俺のところに来た。

どうやら警察は今回の一件に関して、事件性を見出していないらしい。けれどそれでも、事件の可能性がないでもないから、俺に話を聞きに来たのだと言った。
しかし、記憶喪失になった俺に話せることはなく、だから俺は少しでも当時の記憶を取り戻すために、俺がはねられた現場までの道案内を警察に頼んだ。
そうして到着したのが、ここ。うらぶれた公園と、国道に面した道路脇。
俺はこの公園の出入り口である道路脇――歩道から、何の前触れもなく車道に飛び出し、はねられたらしい。映像として残っているのはそれくらい。周囲に人がいたのか、それともいなかったのかも、ドライブレコーダーには記録されていなかった。
実際のところ、どうなんだろうと思う。
俺の不注意なのか、車の不注意なのか。それとも、第三者の手によって俺は車の前に放り出されたりしたのか。――もしかしたら、自らそんな行動を取るほど捨て鉢になる理由が俺にはあったのかもしれないし……意外なところでは、道路の向こう側に何かがあって、それを追いかけた俺がはねられた、なんてのも考えられた。
ただ正直な話、いまの俺にとっては、その真実を知ることが一番の願いではなかった。
いまの俺にとって大事なのは、欠けた記憶を取り返すこと、それだけだった。
「……でも、こうして現場にきたところで、やっぱり思い出せそうにないな」

周囲を改めて見やる――公園には小さな街灯が一つだけ灯っている。遊具はブランコ、滑り台、砂場のみ。近所の子だって来ているか怪しいくらい、さびれた公園だった。

ただここには、俺の知らない出来事があるはずだった。もしそれがただの事故だったとしても、ここに来た理由が全くない訳じゃないだろうしな。そうしてその結果、俺は全てを失くした――十七年の記憶、積み重ねてきたもの。それらの終点がここだった。

もしかしたら、思い出すべきでない記憶なのかもしれない。

俺は記憶を失った今をこそ不幸だと思っているけれど、実はいまは幸福で。こうして過去を詮索し、掘り起こすことで……俺はより深い不幸を得るだけかもしれない。

ただそれでも、俺は――。

「……ん？」

その時。公園の前にある歩道を、スカート姿の女性が通ったのを見た。

こんな寒いのに、よくもまあスカートを穿いていられるもんだと感心した、次の瞬間。

――脳内に激痛が飛び込んできた。ビープビープビープ。思い出すべきでない記憶に、アラートが鳴り響く。けれども俺は、その先の光を掴むため、手を伸ばした――。

「――。――――――――――」

どん、と背中を優しく押された。

それは、慈しむような手つき。そこに込められた感情は激しいものだったのだろうが、その手つき自体は柔らかで、彼はよろめいただけであった。

けれど、それで十分だった。

眩さが走り、目がくらむ。光。白い光。それは車のヘッドライト。

知覚した時にはもう遅い。けたたましいブレーキ音が響き、意識が白む。

次の瞬間、彼の体は中空に浮いていた。それから、知らぬうちに頭が地面へ。頭蓋が割れた。痛みに呻いたが、その呻きは誰にも届かない。

最後の気力で、瞼を押し上げた。かすみ、おぼろげな視界がそれを捉える。

急いで走り出す背中。翻るスカート。……それは、確かに。

彼が通う学園、『私立九ノ里高校』指定の、制服であった――。

「……困ったなあ」

俺の第一声はなんというか、自分でも呆れるくらい、能天気なものだった。

だから、たぶん――なんとなくわかっていたのかもしれない。

記憶を失いはしたが、この事故……ではなく事件の当事者なのだ。なんとなーく、そう

なんじゃないかとは思っていた。こんなにはっきり確定するとは思わなかったが。

――たぶん俺は、あの三人のうちの誰かに、殺されかけた。

もしかしたら、男だけど女装が好きな同級生とか、それともクラスメイトの委員長ちゃんとかにやられた可能性だって、ないでもないけど……正直、薄い線だと思っている。だって、殺されかけたんだぞ？　そんなことをされるには、まずちゃんとした人間関係を築いて、そこからねじれる必要があるわけで――そうなると、今もなお俺と関係しているあの三人のうちの誰かがそうとしか、考えられないのだ。

「……いったい、過去に何があったんだろうな、俺」

俺はそう呟いて、また息を吐いた。少しの間留まって、白い煙が静かに消える。

――正直、犯人捜しなんてつまらんことをする気はない。

ただ、その過去は気になってしまった。そうまでねじれた原因――過去の俺がどんなことをして、どんなことをしなかったのか。それから何があって、逆に何がなくて……その結果、誰に殺されかけてしまったのか。その記憶を取り戻したいと思ったのだ。

そして、俺は気づいていた。

それは結局、犯人捜しをすることと、さしたる違いはないことに――。

第二章　幸福の王子とキャンバス

目を開けると、ここがどこなのか一瞬わからなかった。

ベッドから身を起こし、周囲を確認する――そうして視覚情報を増やしていくことでようやく、いま俺がいるのは自分の部屋なのだということに気づけた。「……なんだか他人の部屋みたいだな」俺はそう呟いたのち、馴染みのない自室をあとにして、リビングに下りる。そこには父親（と名乗った男性）が既に、新聞を広げてソファでくつろいでいた。

「おはよう」

「……おはよう」

なんとかつっかえずに言葉を返せた。本当は語尾に『ございます』を付けたかったが、彼が本当にそうなら父親に丁寧語はおかしいよな。

今日は日曜日。更に言えば雪縫とのデート当日で、待ち合わせは昼頃に駅前だ。……別にもう少し寝てても良かったのに、少し早い時間に起きてしまったあたり、地味に緊張してんのかね、なんて思いつつ洗面所で顔を洗い、それからまたリビングに戻ると、ソファそばの丸テーブルの上で二つのカップが湯気を立てていた。

一つは俺の父親らしい久利のもの。ならもう一つは、たぶん俺のだ。
「コーヒー淹れてくれたん？」
「ああ」
「ありがとう」
俺は言いつつ、カップを手に取り、一口飲んだ。——予想外に甘い。ミルク入り、砂糖入り、もしかしたら練乳入り。だが一口でわかる。俺はこの味が好きだった。
——ちり、と。後頭部で小さな火花が弾けて、記憶が返ってきた——。

「父さんって、再婚とかしないの？」
彼はリビングのソファに座りながら、父の淹れてくれたコーヒーを飲みつつ、そう尋ねた。四角テーブル備え付けの椅子に腰かけていた父は、それに質問で尋ね返す。
「再婚して欲しいのか？」
「いや、そういう訳じゃなくてさ……母さんが死んで、もう七年じゃん？　だからもう、父さんが再婚したところで、母さんも怒らないんじゃないかなーと思って」
「母さんはたぶん、俺がすぐ再婚したって怒らなかっただろうけどな」
「あー、そっか」

ずずー、っと。男二人がコーヒーを飲む音が、二人の沈黙を埋めた。
「そもそもの話をすればな、くー助。俺は未だに、母さんを愛してる」
「……そりゃあ素敵な話だけどさ。でも現実問題、父さんはいま一人なわけだろ？　老後とかどうすんのよ。俺、たぶん家出てっちゃうよ？」
「老後か。あまり考えたことはなかったが、まあ、それなりにやるさ」
「……」
「余計なことは考えなくていいぞ、くー助。お前はいま言った通り、家を出て行っていい。好きにしろ。——俺はそうした。だからお前も、そうすればいい」
「言われなくても」
彼は思案気な顔になりつつ、もう一度コーヒーを啜る。そんな彼を見つめて、小さく、バレないように微笑みながら、父は続けた。
「お前が、好きに生きること。それが俺の、いまの望みだ」
その言葉につい照れて、彼は「……なんだよ父さん。今日はえらく喋るな」と、頬を掻きながら、小さく苦笑するのだった。

眩暈を振り払う。それから、手に持っていたカップの中身を再度啜った。——甘い味。

たぶん記憶の中の俺もこの味を飲んでいたんだろうなと、そんなことを思った。
「――おはよう、父さん」
「ん……ああ、おはよう」
ぴくっ、と僅かに肩を弾ませたが、それでも父さんは平静を装って、二回目の朝の挨拶に応じてくれた。思い出せてよかった。俺にとってはこの人だけが、家族なのだから。
そうして、なんだかむずがゆい思いをしていると、ぴんぽーん、と間延びしたチャイムの音。こんな朝早くから来客らしい。父さんが立ち上がり、玄関に出て行った。
次いで、少しくぐもって聞こえてきたのは、どこかで聞いたことのある声だった。
「おはようございます、お義父さん」
「色町さん。再三の注意になるが、私はくー助の父であって、君のお父さんでは……」
「お気になさらず。くーたんはいますか？」
「……」
「いるんですね。呼んでくださいますか？」
「……少し待っていてくれ」
それからリビングに戻ってくる父さん。彼は申し訳なさそうな顔をしていた。
「すまん、くー助。お前のために居留守を使おうか悩んだら、バレた」

「……うん、しゃーないよ父さん。彼女、俺達の手に負える女の子じゃないと思うし」
「そんな訳で、色町さんが来てる。家に上げたかったら、好きにしていいからな」
それだけ言い残すと、父さんはまるで敗戦当時の日本陸軍かくやという背中を俺に見せながら、自室に引きこもる。……どうでもいいけど、俺の父親に居留守を使わせそうになる色町って、どんな女なんだよ。

◆◆◆

ともかく、嘆いていても始まらない。少しばかり気合を入れた俺が、玄関先に向かうと――そこには。私服もメイクもばっちり決めた、お出かけルックの色町が立っていた。
「……う、うお。どうした？」
「く、くーたん!?　くーたんあなた、パジャマ姿じゃない！　青と白の水玉模様、それに可愛らしくぴょんとはねた寝ぐせ付き！　ああ、なんて愛らしいの!?　もしかしてあなた、この素敵な姿を私に見せるために、わざわざ寝間着姿で？　ありがとうくーたん！　私、これでまた半年は頑張れるわ！　――こうしちゃいられない。スマホでこの御姿を鮮明に記録、保存したのちクラウドにアップしなければ……はあはあ……！」
「よし、お帰り下さい」

「やっ――し、閉めないでくーたん！　撮影会はまだ終わっていないわ！」
「うるさい！　お前の脳みそが終わっとんじゃ！」
割と酷いことを言ったのに、彼女に対する効き目はゼロ。俺がドアを閉めようとすると、悪質なセールスよろしくドアに足を差し挟んできて、その隙間からスマホのカメラを向けてきた。ぱしゃしゃしゃ、と連写の音が響く。なにこれ、下手なホラー映画より怖い。
そうして一方的な撮影会が繰り広げられたあと、それで色町はようやく満足したのか、ほうと一つ息を吐いて、スマホをスカートのポケットにしまった。
「あとでこの写真を引き伸ばして大きいサイズでプリントアウトして繋ぎ合わせてポスターみたいにして天井に張る作業をしないとね……ふふふ」
「やめろ。俺別にジャ○ーズでもないんだからやめてくれ」
「これでいつも一緒よ」
「さらっと怖いこと言うなよ……」
俺がそうツッコんでも、むしろ楽しげに笑う色町。本当、この子にはのれんに腕押し、柳に風って言葉がよく似合うなとか思っていたら、彼女は服装を正し、改めて告げた。
「おはよう、くーたん」
「お、おはよう、色町さん……朝もはよから、何しに来たんだ？」

「何しに来た、とはご挨拶ね。学校ではいつも、一緒にお昼を食べてくれるのに」
「だってここ、俺ん家じゃん。そりゃ学校でメシとは意味合いが違うだろ……」
「そうかしら？　大局的に見たら、学校でご飯を一緒に食べるのも、くーたんの家でいちゃいちゃちゅっちゅするのも、大きくは変わらないと思うけれど」
「そ、それは変わるだろ！　主に『いちゃいちゃちゅっちゅ』の部分で！」
俺がそう叫んでも、色町は楽しげに笑うのみ。優位に立たれてる感がぱなかった。
そもそも、俺はいまこの状況に、完全に戸惑ってるしな……日曜の朝に、美人の同級生が家に押しかけてくるっていう、なんだこれな現状。嬉しくないと言ったら嘘になるけど、記憶を失った俺にとって、色町はまだ気安い相手じゃないので、困惑も大きかった。
「つか色町さんって、俺の家知ってたんだな……？」
「ええ、もちろん。過去に一度、くーたんに招待されたこともあるのよ？」
「え、マジで？　俺とお前って、もうそんなに――っく」
――小さく頭痛。徐々に慣れつつある感覚が頭を痛打した。消失していたものが、ふっと水上に浮かび上がる。俺はまた一つ、それに手を伸ばした――。
「ここが、くー助くんの……」

「何もないところだけど、どうぞ」
「お邪魔します」
そう言って色町は、彼の家に上がり込んだ。きょろきょろと興味深そうに周囲を見つめ、それから小さく息を吐く。どことなく緊張している面持ちであった。
そうして二人は彼の自室へ。色町はまた周囲を見まわし、呟いた。
「男の子の部屋って、意外と綺麗なのね」
「んー、そうか？　そんなに綺麗にしてるつもりもなかったけどな。――んじゃ、適当に座ってくれ」
「……」
「ん？　どうした？」
ふいに体を固めた色町を不思議に思い、彼は尋ねた。一方、彼女はしばし沈思黙考したのち、首を傾げながら問いかける。
「この場合、私はどこに座ればいいのかしら」
「え？　だから好きなように座れば――ベッドもあるし、勉強机備え付けの椅子もあるし、座れるクッションもあるから好きにしてくれ」
「……確認だけれど、私達ってただの友人よね？」

「ああ、そうだな」
「であるなら、ベッドは選択肢としてあり得ないわよね？　異性の家を訪れた際、そこに座ったり寝転んだりするのは、恋人もしくはそれに準じた関係でないとおかしいもの」
「……え、そうなのか？　じゃあ花蓮は――」
「となると、次に座りやすそうなのはビーズクッションの上だけれど……あれ、随分使い込まれている感があるわね」
「ああ、俺の定位置だからな」
「つまり、あそこに私が座ると、間接お尻になると」
「……謎ワード出てきたけど、まあ、そうなるな。――でも、それくらいはいいだろ。俺達学校では、結構色んな人と間接お尻してるじゃん。お尻ビッチじゃん」
「そのワードの方が謎じゃない……ただこの場合、学校とは少し違うのよ。あそこは椅子が共有されている場所よね？　でもこれは、明らかにあなたが定位置として使い込んでいるものじゃない。そこに腰を降ろすというのは、その……性行為を想起させないかしら」
「させねえよ！　……あのなあ色町、お前ちょっと考え過ぎだぞ。じゃあもうそこ座れ」
疲れたようにそう言って、彼は学習机の前にある椅子を指さした。すると今度は不満げな顔になり、色町は言った。

「そこはその、なんて言うのかしら……私達は確かに友人だけれど、でも、そんなに距離を取るのは寂しいじゃない？」
「ああ言えばこう言うなお前は！　……もうどこ座っても同じだから、好きにしてくれ」
半ば投げやりな声音で彼はそう言うと、勢いよくベッドに座り込む。すると色町は、きょろきょろと周囲を見渡したのち、赤ら顔になって――ちょこん、と。
彼が座った隣、ベッドの端にお尻を半分ほど乗せる形で、腰かけた。
「……さっきまでのお前の論、いったいなんだったの？」
「べ、別にいいでしょ。どこに座っても同じだって、そう言ったのはあなたじゃない」
「いきなり俺の部屋に招待しろとか言い出すしさ。色町って最近、少し変わったか？」
「そう？　そんなことはないと思うけれど……でも」
「でも？」
色町はそこで言葉を一つ区切ると、隣にいる彼を流し見る。それから小さく笑んで、彼女は告げるのだった。
「もし変わったのだとしたら、あなたのせいかもしれないわね」

「……あの、色町さん？　たったいま思い出したんだけど……俺がお前を家に招待したん

じゃなくて、お前が俺の部屋に来たいって言ったんじゃないかよ」
「～～～～～～♪」
「ヴィヴァルディの『春』を口笛で吹いて誤魔化そうとするな。つかそれすげえな」
「まあまあ。女の嘘を許すのが男の甲斐性というものよ、くーたん」
俺のそんなツッコミに対し、嬉しそうな顔をする色町。まるでそう言われるのをわかっていたかのようだった。
「それにしても、また記憶が蘇ったのね。いまのは、どうしてそうなったのかしら」
「さあ……たぶん色町さんが言ったことの中に、何か俺の刺激になるような言葉があったんだと思うけど……」
「条件としてはどうなの？　あなたが記憶を取り戻すきっかけとして、やっぱり言葉が大きいのかしら」
「そうだな……他にも色々きっかけになる事柄はあるんだが、今のところ一番多いのは言葉かもな。何かしらのキーワードが誰かの口から出て、それが俺の脳のインデックスに引っ掛かった時、記憶されてる場面を引っ張ってくる感じ――って言ったらわかるか？」
「なるほど、わかりやすい説明だわ」

――でもそうであるのなら、やはり警戒をするのは難しいかもしれないわね。
ぶつぶつと、小さく何事かを呟く色町。それは俺には聞こえない音量であり、自ら声で復唱することで、その事実を脳に落とし込んでいるように思えた。
その行為に訝しい目を向けていると、ぱっと顔を上げる色町……そして、彼女は今更ながら。自分がいま俺の家の玄関にいる理由を、口にした。
「そんな訳で。デートをしましょう、くーたん」
「どんな訳でそうなったんだ!?」
突然のお誘いに、動揺を隠し切れない俺。雪縫の時とはえらい違いだった。あの子が誘ってくれた時には、それを言うまでに随分と時間がかかったものだが……。
「つ、つかデートって……い、いつ？」
「もちろん今からよ。朝八時過ぎから、夜十一時まで遊ぶスケジュールになっているわ。ちなみに、延長も可能よ。その場合、明日の学校は休むことになるわね」
「……」
デートって普通、もっと前の段階で許可を取って、互いの日時を合わせ、なんなら心の準備とかもするものでは……そう思ったが、それを声にはできない俺だった。
ともかく、今日は明確な理由があって、デートは無理なので――俺は口を開いた。

「楽しそうなところ申し訳ないんだが、あの、色町さん。今日は俺、予定があって――」
「……」
わかりやすくしょげた顔をする色町。激しく怒ったり、逆に怖い笑顔を向けられたりすると思っていたので、しょげるという反応に少し面食らった。ギャップ可愛い……。
「それは、私とのデートを反故にする価値のあるものなのかしら」
「反故もなにも、約束をしてないんだけど……ともかく、そっちが先約だったからさ」
「……花屋敷？　それとも雪縫かしら」
「……」
「そう、雪縫ね。あの女よくもぬけぬけと」
「いやなんで今わかった」
父さんの嘘を見抜いたこともそうだけど、そこらのメンタリストより鋭いんじゃないかってくらいの観察眼だった。――それから色町は、俺の目をじっと見る。いまさっき心を見透かされたので、なんだか居心地が悪くなっていると、彼女はふっと相好を崩した。
「でも、わかったわ。今日はあの女とデートなのね。――それじゃあ、今回は諦めましょう。また日を改めるから、その時は。私と一緒に出かけてくれる？」
「あ、ああ！　それならもちろん！」

「ふふっ、ありがとう」
優しい声音と共に浮かぶ、柔らかな笑み。――つい撃ち抜かれた。心音が大きくなるのを感じる。こういう場合、色町はもっとわがままに、「あの女とデートなんてやめて」的な発言をしてくるだろうと身構えていたから、その潔さに好感を持ってしまったのだ。そっか……色町って、こういう顔もできたんだな……。
ただ、彼女がその本領を発揮したのは、次の発言からだった。
「それじゃあ、その埋め合わせと言ったら厚かましいのだけれど……そろそろ、あなたの部屋に上げてもらえるかしら」
「へ？　なんでさ？」
「ねえくーたん。私、今日はあなたとデートをする心づもりで来たのよ？　それなのに何もなくさよならなんて、そんなのは酷い話だと思わない？　――では、お邪魔します」
「説明になってねえ！　つか、勝手に上がろうとするな！」
「ごめんなさい、もう少し論理的に説明するわね？　いまこの場合、あなたが取れる選択肢は二つなの。選択肢Aは、私をさっさと家に上げて、少し可愛がってやって、適当に満足させて帰らせる。選択肢Bは、悶々とした状態の私をこのまま放り出し、あなたと雪縫がデートをしている間中、草葉の陰からの不快な視線に耐え続ける――この二つよ。私が

希望するのはもちろんAだけれど、選ぶのはくーたんよ。さあ、選んで？」
「……昼前までなら、どうぞ」
「うわーい、やったー！」
子供のようにはしゃぐ色町を見て、俺の口からため息が零れる。見てくれは良いんだから、もう少しどっかが違えば、普通に可愛らしい女の子のはずなのになあと……満面の笑みを浮かべる彼女に、俺はそんなことを思うのだった。

◆◆◆

それから色町は、昼過ぎに帰るまで、俺の家でなかなかの狼藉を働いた。
まず俺の部屋に入るやいなや、俺のベッドの上でごろんごろんし始めた。もう俺は大パニック。やめろ、なんでそんなことをするんだ、と咎めたら――「猫って、自分の縄張りにニオイをつける習性があるそうよ」と返された。俺はもう何も言えなかった。
次いで彼女は、家にあるもので勝手に朝食を作った。すげえ美味かった。ついでに父親の分も作っていた。父さんもそれが美味しかったことに、なんだか微妙な顔をしていた。
そのあとは俺の部屋で、たわいもない話をして過ごした。……女の子と、部屋で二人きり。緊張しない訳がなかったが、どうしてだろう。色町と二人でいるのは、さほどしんど

くはなかった。彼女は癒し系という感じでもないのに、なんでなのだろうか……。
ちなみに、これは後日談なのだが……数日後。俺の部屋のベッドサイド、本やティッシュ箱などが置かれた小さなスペースに、女物の黒いパンティが紛れているのを見つけた。完全に色町の仕業である。俺が雪縫や花蓮を部屋に連れ込んだ際に、「何これ？」となるトラップに違いなく、それを発見した時の俺は、言い知れぬ恐怖を感じたのだった――。
と、とまあ、そんな訳で。午前中にも色々あったが……気持ちを切り替えて、駅前。
「おーい雪縫！　ごめん、待たせたか？」
「あ……う、ううん、待ってない――実はちょっと待たされたけど、それを言わないことでくーさんに気遣いができる女だと思われる筈だから、待ってない」
「なんでそこまで言っちゃうんだ」
俺はそうツッコみつつ、駅前に一人立っていた雪縫を、正面から見つめた。――当然私服姿で、彼女らしいキュートでガーリーな出で立ちだった。
「……そ、そんなにじろじろ見られると、嫌……」
「あ。ご、ごめん！」
両腕で自身を抱くようにしながら、頬を朱に染める雪縫。……つい見惚れた。俺は今から、こんなに可愛い子とデートするのだと思ったら、舞い上がってしまったのだ。

もちろん、今日の俺の大目的は、失った記憶を取り戻すことだけど……その目的のために、自分がいまとんでもないことをしている事実を、改めて噛みしめる。デート。可愛い女の子とデート……やばい、心拍数がグングン上がってきた。
「そ、それで？　昔の俺はここから、どうしたんだ？」
「腹ごしらえをしようって、あるところに連れて行ってくれた。――来て」
言われるがまま、雪縫と俺は連れ立って歩き出した。場所としては駅のそばにある繁華街を行くらしい。家からも近いし、どうやら俺はこの辺を遊び場としていたみたいだ。
そうして到着。俺と雪縫のデートにおいて、最初に辿り着いた場所は――。
「牛丼屋？」
「そう」
「……いや、待て。整理させてくれ。――今日ってあれだよな。『昔、俺が雪縫を連れて回ったデートコース』を、お前が案内してくれるっていう、そういう趣旨だよな？」
「そう」
「それの一発目が、牛丼屋？」
「そう」
「……」

「くーさんはきっと、死ぬまで童貞だと思う」
「なんてパワーワードで俺を責めやがるんだ……」
雪縫のあんまりな発言に俺がそう返すと、楽しげな顔で彼女は続けた。
「正直、最初ここに入ろうと提案された時、拒否しようとした。けど、すごくいい笑顔で『俺が奢ってやるから！』って言われて、何も言えなくなった」
「……ええと、その……過去の俺がご迷惑をおかけしました」
「よきにはからえ」
言葉の使い方は微妙に違う気もするが、雪縫がカッコよく見えた俺だった。こんな所業を受けたのに、このあともデートを続けてくれた彼女って、もしや天使なのでは？
そんなこんなで入店。俺は券売機の前に立つと、エンジェル――もとい雪縫に告げた。
「せめて俺が奢るから、好きに買ってくれ」
「ありがとう。それじゃあ――牛丼の特盛。サラダ、半熟卵、牛皿並もお願い」
「……体に見合わず、すげー食うんだな」
「一度、家族で回らないお寿司を食べに行った時、あまりの美味しさにぱくぱく食べてたら、お父さんに『霙、もう帰ろう？　な？』と泣きながら懇願されたことがある」
「がんばれ、日本のお父さん！」

「それ以降、家族で外食をする際には、私だけまずコンビニおにぎりを二個食べなければいけないルールができた」
「誰も悪くないのになんて悲しいエピソードなんだ」
「コンビニおにぎりも大好きだから嬉しい」
「いやハッピーエンドなのかよ」
そんな会話をしつつ、雪縫に指示された食券を購入。ちなみに、俺は牛丼の並盛にした。
出てきた食券を掴み、それを店員に渡そうとする。そしたら雪縫に「テーブルについてからでいい」と言われた。どうやら細部のルールを忘れてしまったようだ……俺は雪縫と対面する形でテーブルにつくと、水を持ってきてくれた店員に食券を渡した。
「牛丼かー……記憶を失くしてからは初めてだな」
「そういえば事故以降、食生活の方ってどうなってるの？」
「毎回の食事で、俺が好きなもの、嫌いなものを思い出してるって感じだ。食べられないってものはほぼなくて、食べてるうちに『あ、これ俺好きだったかも』ってなることが多いな。昨日はデザートにプリンを食ったら卒倒しかけた。アレうま過ぎない？」
「わかる。……そういえば、ここで牛丼を食べたあと、次の場所に行く前に、くーさんはコンビニでプリンを買ってくれた気がする」

「あからさまなデートプランの追加やめろ。そんなタイムリーなことあるか」
そんな会話のキャッチボールを数回しているうちに、牛丼が運ばれてきた。早え！　いまさっき食券を出したばかりだっていうのに、牛丼ってこんな早く出るものなのか？
驚きつつ、俺は牛丼に顔を近づけた。すると、つゆの甘い匂いが鼻孔をくすぐる。
「いただきます」
二人の声が重なった。上着を脱いで臨戦態勢になった雪縫は、手慣れた様子で半熟卵をどんぶりに落とし、傍らの箸を取って食べ始める。ぱくり、ぱくり、ぱくり。小さな口でどうやっているのか、その食べ姿は大胆かつ上品で、見ていて気持ちが良かった。
一方の俺も箸に手を伸ばし、それから牛丼に向き直る。……そういえば記憶を失って以降、牛肉を食べる機会なんてついぞなかったな、なんて思いながら、一口頬張った。
「ん……うま、い――」
肉と米の味がじわっと口の中に広がり、うまみを感じた――次の瞬間。
何故か急に気分が悪くなった。より正確には、口の中に気持ち悪さを感じたのだ。
匂いなのか食感なのか。先ほどまで美味しそうだった、実際美味しいであろうそれは、俺の口内でだけ土くれと化した。何度咀嚼しても、もちゃり、もちゃりと、嫌悪感が染み出てくるだけ。少しパニックになる。なんだこれ。いま俺は一体何を食ってるんだよ。

「う、ぷ――」
「……？　どうしたの、くーさん」
不思議そうな顔で俺を見つめる雪縫。俺はそれに何のリアクションもできず、必死に口を手で押さえた。無理にでも飲み込もうとするが、飲み込めない。これはやばいな……。
俺はすぐさま周囲を見まわし、トイレを見つける。慌てて席を立ち、そこに直行した。
「う、む……おええええ！　……はあっ、はあっ、くそ……ごほっ」
間一髪。洋式トイレの中に、噛んでぐちゃぐちゃになった、元は牛丼だったものを吐き出した。そうすると、気分はいっきに楽になる。俺は一つ、ふう、と息をついた。
トイレを流し、雪縫のいるテーブルに戻る。それから一口だけ水を飲み、喉を潤した。
「だ、大丈夫？　くーさん。急に、吐き気を催したみたいだけど……」
雪縫が弱々しい声で俺に聞いてくる。不安げな瞳、気づかわしげな視線。随分と心配させてしまったようで、だから俺はできるだけ軽い調子で言葉を返した。
「ああ、心配かけてごめんな。どうしてか、牛丼を食べたらちょっと気持ち悪くなっちゃってさ……」
「え。なんで？」
「わからん。体調は良いと思ってたんだが、見誤ったかな……空気悪くしてすまん」

「そ、そんなのは気にすることない、けど……本当に大丈夫？」
「ん。なんか食欲は一気に失せたが、別に体のどこが悪いって訳ではないと思うしな。だから――ほら。雪縫は俺の代わりにたーんと食ってくれ」
「う、うん……」
心配そうにちらちらと俺を窺いつつ、それでも箸は止めない雪縫。なんだか申し訳ないな、せっかくのデートだっていうのに……。
なんて思っていると、ふいに思わし気な目を俺に向けながら、彼女は言った。
「そ、その、言いにくいんだけど、ええと……」
「なんだ？　何かあるなら、遠慮なく言ってくれ」
「それじゃあ、あの――くーさんのぶんの牛丼、貰っていい？」
「……」
「あっ、いまくーさんの中にある、私に対する好感度メーターが『ひゅううん』て音を立てて下がったのがわかった。まずった」
「い、いやその、別にいいんだけどな？　いいんだけどさ……なんつーのかな。それ、いま言うことか？　自分の分を食い終わってからでもよくね？　とは思ったよな」
「ご、ごめん……今日はくーさんとのデートに舞い上がって、コンビニおにぎり二個を食べてくるの忘れたから……残すのなら食べたいと思って、焦った」
「コンビニおにぎりのルール、自分でも課してたんかい」
ちなみに、いま『くーさんとのデートに舞い上がって』と言われたことに、俺も舞い上がっていた。俺とのデートを楽しみにしていてくれた、その事実がすげー嬉しい。
とりあえず、どっちみち俺はもう食べる気にはなれなかったので、自分の牛丼を彼女の方に押しやった。「食いかけで悪いけど、どうぞ」と言いつつ渡すと、彼女は。
「あ、ありがとう！　食べかけでもいい。むしろありがとう！」
と謎の発言をしてから、元俺の牛丼と、自分の牛丼を交互に食べ始めるのだった。牛丼は逃げないから、ゆっくり食べなさいよ。

◆◆◆

「げふっ。ふぅー、お腹いっぱい」
「……女の子がゲップをするという割と衝撃的な行動についてコメントをお願いできますか、雪縫さん」
「そういう時もある」
「ちょっと豪胆過ぎやしないか」

「そんなことない。ゲップくらい普通。それに私、くーさんと一緒にいる時に、おならはしない。したくなっても我慢する。それが女の子だから。――ふふん」
「いやそんな自慢げにない胸張られても……」
「……ない胸？」
「さてそれでは雪縫さん、次の目的地は？」
「話を逸らさないで。ない胸ってどういうこと」
「……俺が悪かったから、そんな猛禽類みたいな目で俺を見ないでくれ。ごめんって」
「うるさい。それより――ほら見てくーさん。こうやって……こうやって無理やり寄せれば、ある！　服の上からだと少しわかり辛いけど、ある！　こう両脇からぐっと戦力を中央に結集させれば、ある！　小さくてもおっぱいがある！　見ろ！」
「わかった。わかったからこんな往来でそんな内容の大声を出さないでくれ」
「いいやわかってない！　くーさんさっきから全然こっち見てない！　――私にはおっぱいがある！　谷間がある！　寄せて上げるブラでようやくCに届くくらいの慎ましいサイズではあるけど！　ほら触ってほら！　くーさん！　くーさん触って！　この辺りが谷間だから！　いまならなんとかできてるから、ほら！」
「いやほんと勘弁してくれって！　わからないか⁉　いま俺、顔真っ赤なんだよ！　そし

てたぶん雪縫も、マジで俺に触られた時にこそ、後悔することになると思うぞ！　いいのか⁉　いま俺、雪縫のおっぱい触っても、本当にいいのかよっ⁉」
　食後のちょっとしたトークが一変、雪縫のコンプレックスを踏み抜いたせいで、なんだかすごい言い争いになる俺達。しかし、俺の一言がようやく雪縫に届いたらしく、彼女はふいに「あ……」と小さく呟くと同時、頭から湯気が出そうなくらい頬を赤らめた。
　そのまま、恥ずかしげに地面を見つめる。雪縫は両手で顔を隠しながら、呟いた。
「え、ええと、その……いまのは、ちょっと暴走した……ごめん……」
「いや、いいよ……元はと言えば俺が悪かったんだしな。俺の方こそ、ごめん……」
「……『戦力を中央に結集』ってなに……あああああ……！」
　今更ながら自分の言ったことに恥じらいを覚える雪縫であった。
　さて、そんな風に楽しく（？）会話をしつつ、次の目的地に足を向ける我々。てくてく歩いて到着したのは、こんな町中にこんなものがあったんだ、という場所だった。
「と、という訳でやってきました、栗上フィッシングセンター！　わーぱちぱち！」
「あのー、雪縫？　たぶん、照れ隠しにテンション上げたりしない方がいいと思うぞ。それ、恥の上塗りになってるから」
「……」

「痛い痛い痛い！　スネやめて！　スネ蹴るのやめて！」
「くーさん意地悪。今のは乗ってくれるところ。この唐変木。人間失格。羅生門」
「最後のだけ悪口になってないぞ……」
　そんな風に仲良く（？）言い合いしつつ、俺達は釣り堀の受付へ。そこで入場料を払い、更に竿、餌をレンタルする。休日のためか、釣り堀にはそこそこ人が入っていた。カップルがちらほらと、家族連れが大半という客層。どこか牧歌的な雰囲気を感じながら、俺と雪縫は空いたスペースに入る。二人並んで、小さな箱のような椅子に腰かけた。
「そういや雪縫、昔の俺はなんて言って、お前をここに連れてきたんだ？」
「別に釣りが得意だから、とかそういう訳じゃなさそうだった。ただ単に、二人で行ったら面白そうだから、って――そんなニュアンスだったと思う」
「ふーん？　で、実際は？」
「くーさんと一緒なら、大抵楽しい」
　がっ、と心臓を鷲掴まれた。俺は驚いて雪縫を見やる。彼女は上機嫌といった様子で、魚用の餌を団子状に丸める作業に没頭していた。……雪縫ってこういう、気の抜けた時の一言にこそ、威力があるよなあ。油断してたら一瞬で好きになりかねん。
「そ、そうか……じゃあ今回もそんな風に楽しめれば、その記憶を取り戻せるかもな」

「……うん。きっとそう」
「よし。それじゃあフィッシュと行くか！」
　俺はそう気合を入れ直すと、思い切り竿を振りかぶり、投げた。刹那、勢いよく遠方へと飛んでいく――餌だけが。投げた衝撃で針からすっぽ抜けたのだ。ぽちゃん、と団子状の餌が遥か遠くに落下したのに続き、針だけがそのずっと手前で水面に沈んでいった。
「ぷ、ぷふっ……く、くーさん、いま……餌だけ……」
「お、おい、笑うなよ。俺だって知らなかったんだから――ふふっ」
「あれだけ勢いよく投げたらそうなる……ぽーんって……くふっ……餌が落ちたとこに、いっぱい鯉集まってきてる……針ないのに……ふふふっ」
「わ、笑うなって、くふっ――あはははは！」
　なんだか心地のいい時間だった。結局、今も彼女との記憶は戻っていないし、だから俺にとって雪縫は未だ、なんとも信用のならない他人なのだが――今だけは。
　こうして笑い合っている時間ぐらいは、彼女のことを。昔から俺のそばにいる大切な女の子だと、そう確信できる気がした――。
「お、またフィーッシュ！　これで鯉は五匹目だな」

「……でもそいつ、生きが悪い。小物」
「他人が喜んでる時にケチをつけるなよ……」
「……釣れないとつまらない」
「俺と一緒なら大抵のことは楽しいって、そう言ってくれてたような気が……」
「な――そんなこと言ってない……！　と、思う……けど……」
どうやら先の発言は無意識的なものだったらしい。雪縫はそう言って赤ら顔を俯けた。
でも、確かにそうだよな。いくらデートで来てるからって、彼女だけボウズ（一匹も釣れないこと）じゃあ落ち込むし、何より釣りに来た醍醐味を味わえていない。
次に何か魚が引っ掛かったら、彼女に竿を渡そうか――と考えていたところで。
「きた……！　んっ！」
雪縫のウキがぐんっ、と水中に引きずり込まれた。ヒットだ！
彼女は反射的に釣竿を上げる。――しなる竿。揺れる釣り糸。その先は確かに、水中の奥深くへと繋がっていた。
「や、やった！　くーさん、私、釣れた！　しかもこれ、デカいと思う！」
「ああ、デカそうだ！　でもまだ釣れてないから、油断するなよ！」
「こいつめ！　早く姿を現せ！」

興奮して立ち上がる雪縫。その瞬間、バランスを崩して「わっとと！」と声を漏らしながら、彼女は前方によろめいた。その先は釣り堀だ――俺も慌てて立ち上がる。
雪縫は前へ前へとつんのめりながら、それでも竿を握っていた。「あわわ！」危ういバランス。もう数秒でも経てば、そのまま池にざぶーん、となりそうなところで、俺は彼女の竿を横から掴むことに成功した。よ、よし！　これなら、雪縫が池に落ちる心配は――。
「ちょっとくーさん！　私の竿、握らないで！　邪魔しないで！」
「ええ⁉　でもお前、俺がこの手を離したら、池に落ちるぞ！」
「自分一人の力で釣りたい！」
「変なところで頑固！」
俺のそんなツッコミに、あははっ、と笑う雪縫。楽しい。――いや、楽しんでる場合か。
そんな会話があったあとも、俺が雪縫の竿を掴んだままでいると、彼女は叫んだ。
「竿じゃなくて、私の体を支えて！」
「え……そ、それって――」「早く！」
雪縫に急かされ、慌てた俺は竿から手を離すと、すぐさま雪縫の体を……その小さな体軀を、後ろから抱き留めた。「ひゃんっ！」変な声が雪縫の口から漏れる。俺も先ほどまでとは違う意味で、心臓がバクバクだった。――あ、あれ⁉　というかこれ、もしかして

俺の手、まずいところ触ってないか!?
「んっ!? く、くーさん!? ちょ、そこは……!」
「ご、ごめん! マジでごめんだけど、さっさとそれを釣り上げちゃってくれ!」
「……う、うん!」
竿に引っ張られるようにつんのめる雪縫の小さな体を、後ろから抱き支える。それを受け、フルパワーで竿を引く雪縫。彼女は「うおおおおおお!」と魔王に立ち向かう勇者もかくやという雄たけびを放ちながら、思いっきり竿を振り上げた。
その時だった――ぷつん、という音を立てて、釣り糸が竿の根本から切れたのは。
「ぐぎゃっ」「うげっ!」
雪縫が後ろに倒れてくるのを支えられず、俺も後ろに倒れ込む。……そうして脱力する俺と雪縫。しばらく呆けたのち、雪縫は座った姿勢のまま、俺を睨みつけた。
「釣れなかった」
「ああ、残念だったな……」
「おっぱい、触られたのに」
「……」
火照った顔を逸らす。バレてましたか。バレてましたよね。

もちろん、能動的にじゃない。雪縫のおっぱいを触ろうという目的を持って、そうした訳じゃないんだが……まあそんなの、雪縫からしたら関係ないもんな。触った方がとにかくギルティ。それは仕方がないことなので、俺はただ頭を下げた。
「ごめん、雪縫……本当にごめん……」
「……」
しかし、俺の謝罪に何の返事もしない雪縫。これは相当怒らせていると思った俺は、だから次の瞬間には罵倒されると身構えたが、雪縫の口から出たのは意外な言葉だった。
「……や、柔らかかった?」
「え――はい?」
「だ、だから……! わ、私のおっぱいが柔らかかったかって、聞いてる! こんなこと、二度も言わせないで……!」
「……」
つい押し黙ってしまう俺。――いや、意味がわからん。どうして俺はいま、雪縫の胸に触れたことを謝罪したのち、その弾力性を問われてるんだ? 乙女心難し過ぎない?
「は、早く、答えて……」
そうして俺が何も言えずにいると、雪縫は心底恥ずかしそうに、赤らんだ顔を俯けてそ

う呟いた。……と、ともかく、いま俺が黙り続けていることによって、彼女を辱めてることに気づいた俺は、だから――俺なりに勇気を振り絞って、嘘のない感想を口にした。

「そ、それじゃあ、正直に答えさせてもらうと……ぶ、ブラの感触ばかりで、あまり柔らかくはなかったです……」

「う、嘘!?　ブラの上から乳首までいかれてたのに!?」

「いきなりとんでもない発言をしないでくれないか!?」

「で、でも、ブラじゃない部分は!?　私、ブラじゃない部分も触られてる感あった！　だから、そのあたりは柔らかかった？」

「いや……正直、そこまではわからなかったというか……」

俺が雪縫の胸を触ったと気づいたのも、彼女を抱き留めた際に何か硬い感触を指先で得てしまい、それが何かを考えた時に、彼女のブラだとわかったからだ。――そんな訳で、雪縫の胸の感触については、あまり感じられなかったというのが俺の本心だった。

「そ、そんな……私としては、くーさんに滅茶苦茶されてる感があったのに……！」

「……あの、雪縫さん？　それ、よそではあんま言わないでくれな？」

「あの二人にサイズで勝てなくても、柔らかさでは勝てると思ってたのに……うう、私、貧乳は貧乳でも、硬くて揉み甲斐のない、クオリティの低い貧乳だったなんて……」

「おーい、大丈夫か雪縫。というか、胸のクオリティってなんだ」

「肌艶はいいし、ハリも凄いのに……」

「お、おい雪縫？　その辺にしときなさい？」

「綺麗なピンクなのに……」

「おい雪縫！　自分を大事に！」

全身全霊でそう叫ぶ俺。しかし、それが聞こえているのかいないのか、雪縫は涙をちょちょぎらせながら、膝を抱えてその場に座り込んだ。それはお使いで迷子になってしまった幼児を思わせた。そ、そんなしょげなくても……。

俺はおたおたしつつ、彼女に駆け寄る。すると彼女は、涙声で続けた。

「ううう、くーさん……私、もしかして女の魅力、ない？」

「――――」

そのまなざしに射貫かれた。揺れる不安げな瞳に、愛らしさを感じる。……それを受けて俺は、雪縫と目を合わせた。しょげた様子の彼女を見て、つい励ましたくなったのだ。

「そんなことない。おっぱいはその……な？　あんまないかもしんないけど、でも、それで魅力がないと落ち込むのは違うと思うぞ」

「そう……？」

「ああ。おっぱいの大きさと女の魅力は比例しない。現におっぱいが大きいだけの、魅力的じゃない女性だって世間にはいるだろ？」
「確かに……色町とか、そうだ……」
「それにはノーコメントだが……」
俺は苦笑しつつも、雪縫の励みにきっとなるであろう重要なことを、彼女に告げた。
「なあ雪縫。一個だけ最低な、でもお前にとって救いになることを言ってもいいか？」
「なんだか前振りが怖いけど……なに？」
「男は、貧乳をコンプレックスに感じている女の子が好きだ」
「……ふふっ、最低」
目じりに涙は残っていたけれど、彼女はそう言って笑った。なので俺も彼女に笑い返して、そっと手を伸ばす——握られる右手。内心ではどぎまぎしつつも、思わず出してしまったその手を引いて、彼女を起き上がらせた。
こうして俺と雪縫のデートは、記憶を取り戻す、という大本の目的を果たせぬまま。
でもデートとしては、二人で笑い合う時間の多い、楽しい一日となったのだった。
「ちなみに、くーさんは？　実は貧乳の方が好き？」
「忘れたのか？　俺は大きければ大きい方が——痛い！」

「空気読め、この無神経」

◆◆◆

雪縫とのデートが終わって、数日後。その放課後。
「んー！　やっぱり、アイスは寒い日に食べるのが一番だねっ！」
俺はいま、今日は部活のなかった花蓮と共に、二人で下校していた。ただ下校とはいっても、それは帰路を急ぐ道程ではなく——俺達は現在、コンビニで食料を買い込んで、そのままコンビニ前のベンチに座り、アイスを食べながら話し込んでいるところだった。
「はー、アイス美味しいなー。帰りたくないなー」
「ん？　急にどうしたんだ？」
「ねえねえねえ、聞いてよくーくん！　聞いてよくーくん！」
「聞いてるし、聞くからそう繰り返すな。お前はインコか」
「最近うちのお母さんが、あたしの女子力の低さに危機感を感じたみたいでね。すっごい家事を教えてくるんだよー……今日も帰ったら、一緒に晩御飯の支度をしなくちゃいけないんだー。憂鬱だなー」
「それぐらいで憂鬱なのか……別に、夕飯の支度を手伝うのはいいことじゃんか。お母さ

んを助けてあげろって」
「え？　なんであたしがそんな面倒なことをしなきゃいけないのさ？　やだよ」
「……」
　何バカなこと言ってんの？　って顔で言われた。……すごいな彼女。どうやら花蓮の中には、自分で飯を作る、という考えが微塵もないらしい。
「今の時代、電話一本で美味しいご飯がお家に届くんだよ？　それなのに料理なんて、バカバカしくてやってられないよー。そんな暇があるなら、筋トレとかランニングとかしたい！　あたしの中にある、Mとしての欲求を満たすことに時間をかけたいよ！」
「絶対そんなことに時間をかけるより、料理の修業をした方が有意義だと思うが……」
「ちっちっちっ。わかってないなあ、くーくんは。――死にかけるまでランニングをして、ランナーズハイの向こう側を見たあと、やっとの思いで家に帰ってきた時に飲む水の美味しさったらないんだよ!?　また、あの水が飲みたいなあ……うへへへ……おっと、考えてたらよだれ出てきちゃった」
「なんだろう、ランニングってすげえ健康的な運動の筈なのに、花蓮がそれをしてる理由ってすげえ不健康だよな……」
「ドラッグとかにハマる若者の気持ちが、ちょっとだけわかるよ！」

「お前は今すぐランニングをやめろ！」
　俺がそうツッコんでも、花蓮は「あははー」と朗らかに笑うのみ。やめる気がないのが丸わかりだった。自分を追い込むことに快楽を見出しすぎだろ。俺はそう思いつつ、そもそもの話題――『花蓮の女子力が低い問題』について、尋ねたかったことを口にした。
「……これは、もしもの話なんだけどさ。お前が、その……誰かの妻になるとして」
「え？　あたしお嫁さんになるの？　もしかしてくーくんの!?」
「な、なんでそうなるんだよ。『誰かの妻』って、そう言っただろ？」
「あ、そっか。……えへへ、ちょっと残念」
「――――」
　そう言って、微笑を浮かべる花蓮。何気ない仕草、何気ない言葉だったが、それを受け、俺の鼓動が大きくなった。いまのは狙っていない分、彼女の自然な可愛らしさが出ていたというか……い、いけないいけない。話を戻さないとな。
「と、ともかく、例えばの話だ。――例えば花蓮が結婚して、奥さんになった時。その場合、お前は家で何をするんだ？」
「んん、どうだろうねー？　家事はできないし、掃除も苦手だし、ご飯は出前を頼めばいいから……あれ？　ずっと暇だ。あたし、結婚したらずっと暇になっちゃうや。――わー

い！　じゃああたし、お嫁さんになったら、ずっとスポーツジムに通おー！　そんで、ボディービルダーみたいな体になるの！　いやー、楽しみだなー。最高の人生だなー！」

「……将来、お前の旦那になる男って、すげー苦労しそうだな……」

花蓮のお母さんが焦って家事を教え始めた理由がなんとなくわかった……と、その時。

――脳髄を幽かな痛撃が走る。それは小さな稲光。閃光は痛みと共に頭部を駆け巡り、そして代わりに、俺の海馬に過去の記憶を残していった――。

「お前ってさ、結婚願望とかあるのか？」

賑やかな街並みを並び歩く二人。話題に困ったから選び取っただけ、という自然さで、彼は花蓮に問いかけた。すると、彼女は潑剌とした笑みを彼に向ける。

「そりゃあるよー！　お嫁さんになってウエディングドレスを着るのって、女の子に生まれたらみんなが持つ夢だもん」

「ふうん……」

「ちょっとだけ迷うのは、白無垢も捨てがたいってところかな！　……子供の頃ね、あたしと仲の良かった近所のお姉さんが、神社で結婚したんだー。それを見て、お姉さん綺麗！　あたしも神社で結婚したい！　って思ったりもしたから――うーん迷う！」

「……でもお前、家事が一つもできないじゃん」

「まあね！　だから、家事のできる人と結婚しようかなー。でもそうなると、あたしがお金を稼がなきゃいけないのかな？　まあ家事よりは楽しそうだよね、あははっ」

「……」

なんでもない会話の筈だった。けれど彼は、深く考え込んだ顔をする。隣の彼女を見つめる視線が、静かに、けれど確かに熱を帯びていた。

「でもなー。あたし、まだ恋とかしたことないからなー。現実味ないや」

「そっか。じゃあ、するにはちょっと早い話だったかもな」

「だね。でもあたし、一個決めてることはあって――」

「ん？　なんだよ？」

「結婚式の司会は、くーくんじゃなきゃ嫌ってこと！　あたしにとってくーくんは、本当に、あの……て、照れくさいから言わないけど！　だから、くーくんがいいんだよ！」

「――」

彼女は照れ隠しに彼の前を歩いていたため、彼の顔は見えなかった。

すると、彼は咄嗟に、花蓮の手を握る。それに驚き、彼女は振り向いた。

「くーくん……？　ちょっと、どうしたのさ？　そんなに強くしちゃ痛いよ……」

「――え。ああ、悪い……」
「大丈夫？　何だか怖い顔してるけど。少し休もうか？」
「いや、平気だ。大丈夫。ちょっと――自分の気持ちに、気づいちまっただけだから」
いつから、齟齬が生じたのか。
彼は彼女の手を、今度は努めて優しく、握り直すのだった。

「――――」
「？？？　くーくん、どうしたの？」
花蓮の言葉に返答できない。いまのは、ちょっと……いや、かなり俺にとって重要な過去だった。当然、その感情まで俺の中に降りて来た訳じゃないが、でも、わかった。
どうやら俺は事故以前、花蓮のことが好きだったらしい。
幼馴染としてじゃない。異性として好きだった、そう確信できた。
相変わらず心理描写は曖昧で、だからあの時の感情を完璧に理解することは難しかったけど、自分のことだからな……それを思い出した瞬間、それだけはわかってしまった。
「花蓮――」
「ん、なに？　あ……また記憶、取り戻したの？」

「ああ、いや……大した記憶じゃ、なかったけどな」
「……ふうん、そっか」
花蓮は喜色を抑えたような微笑を浮かべ、呟いた。その大人びた笑みに鼓動が速まる。どうにも顔が熱い。……花屋敷花蓮の顔を、まともに見れない俺がいた。
意識しているのはそうなんだろう。でも、どれだけ意識しているのか、その明確な答えは出し辛かった。――花蓮のことを好きだったと思い出した、今の俺。その俺はいま、花蓮のことが好きなんだろうか？　それとも、思い出したから意識してるだけか？
ひとまず、俺は首を幾度が左右に振り、感情をフラットな状態へと揺り戻す。それから、そういう思いがあったことは一度棚上げにして、現在の方でしていた話を続けた。
「と、とりあえず……お前の母親の言う通り、料理の練習くらいはしといた方がいいんじゃないか？　そしたら、どうやら低いらしい花蓮の女子力も、自然と高くなるだろうし」
「なっ――くーくん、その言い方はナチュラル失礼じゃない⁉　というか、あたし実は女子力高いよ？　スカウターで計ったら、五十三万くらいは女子力あると思うよ！」
「その返しがもう、女子力低いんだが……」
「『ドラゴン〇ール』大好き！　少年漫画大好き！　いえーい！」
男友達としてなら最高っぽい女の子だった。

俺はそれについ苦笑しつつ、スマホをいじる。検索ワードは『女子力　テスト』――すると早速、女子力チェックなる記事が出て来たので、彼女に尋ねてみた。

「『この時期、ムダ毛の処理はしていますか？』」

「ムダ毛？　人の体に無駄な毛なんてないよ？」

「『メイクをファッションに合わせて変えていますか？』」

「メイクなんか普段からしないよー。……そういえば、一回メイクの練習をしようと思って、口紅をまるまる一本使ったら、お母さんに死ぬほど怒られたっけ。あははー……」

「『ハンカチは常に持ち歩いていますか？』」

「トイレした後は、制服で拭いちゃうかな」

「……『部屋はいつも清潔にしていますか？』」

「綺麗だよ！　お母さんが掃除してくれてるから！」

「診断結果。――あなたの女子力は既に死んでいます。来世に期待しましょう」

「嘘だあああああ!?」

俺はサイトの結果が出る前にそのページを閉じ、勝手に診断結果を告げた。それを受けて花蓮は頭を抱えているが、むしろなんで女子力が高いと思っていたのか。

そんなこんなでアイスを食べ終えた俺と花蓮は、いい加減ちゃんと帰路へとつくために、

ベンチから立ち上がって歩き出した。……さっきの記憶を取り戻したことにより、花蓮と隣り合って歩くことに変な感慨というか、ありていに言えば心臓が普段よりドキドキしているが、俺はそれを誤魔化すため、今日色町に聞き忘れたことを、花蓮に聞いてみた。

「なあ花蓮。俺ってさ、牛丼苦手？」

「はい？　牛丼って、そんなの苦手もなにも……あっ!?　もしかしてくーくん、牛丼食べちゃったの!?」

「あ、ああ……」

「あっちゃあー」

別に隠すつもりはなかったんだが、その牛丼は雪縫と一緒に食べた、ということを伝えるタイミングを失った俺に、花蓮は心底苦い顔をしながら続きを促した。

「それで、どうしたの？　牛丼、食べられた？」

「いや、食べられなかったんだ。一口だけ食べて、もどしちゃって……あんな事故のあとだしさ。俺の体調の問題でもどしたんだと、そう思ってたんだけど――」

「違うよ、くーくん。くーくんはね、牛肉が食べられないんだよ。……こうなるなら先に言っておけばよかったなー、ごめんね？」

「いや、それはいいけど……」

いま衝撃的なことを聞いた気がした。牛肉が食べられない？　俺が？
でも、それはおかしい。だって雪縫は、俺の方から彼女を牛丼屋に誘ったと言っていた。そもそも、あの日のデートは過去の焼き直しで、昔の俺が雪縫を連れまわしたデートコースを、彼女が再現してくれた、と……そういう話じゃなかったか？
でも俺は、牛肉が食べられないらしい。実際、食べられなかった。――つまり俺が雪縫とデートをしたとしても、牛丼屋に彼女と連れ立って入ることはほぼあり得ない。
じゃあ、過去に俺とデートをしたことがある、というのは雪縫の嘘だった？
そして、それはつまり、どういう真実に繋がるんだ？
慎重に考える。それから俺は、もう一つ、尋ねるべきことを重ねて花蓮に尋ねた。
「ちなみにだけどさ。俺が牛肉ダメなことって、花蓮以外には割と隠してたか？」
「んー？　なんかよくわかんない質問だけど、そんなことないと思うよ？　それこそくーくん、シャレにならないレベルで牛肉ダメだし……だから隠したりはしてなかったんじゃないかな。むしろ、くーくんから率先して言っておかないといけないことだもん」
「つまり、俺とある程度仲が良い奴なら、それぐらいのことは知ってると……」
「うん。――まあくーくんと仲が良い人なんて、数えるほどしかいないけどね！」
「話の流れで酷いことを言うなよ。俺を傷つける達人かお前は」

俺はそうツッコみつつ、頭の中で考えをまとめる。――ある程度仲が良かったら知っている。そういや色町が作ってくれる弁当には、いつも牛肉がなかった。あるとしても豚や鶏で、だから彼女もそのことは知っていたんだろう、当然ながら。
でも、彼女は――。
『だ、大丈夫くーさん？　急に、吐き気を催したみたいだけど……』
その心配に、嘘をついている色は見られなかった。
知っていて、それでも俺を陥れようとしていた感じはない。……であるなら、彼女は知らなかったのだ。ある程度俺と仲が良かったら、知っていることも。
「……雪縫と少し、話をするか」
気は進まなくとも、花蓮に聞こえぬよう、小声で俺は呟いた。
そうして腹を割って話したあとにこそ、俺と彼女の始まりがある筈だから。

◆◆◆

「そ、それで？　話って、なに……？」
翌日の放課後。既に人の出払った、俺のクラスの教室にて。
事前に雪縫を呼び出していた俺は、とりあえず彼女を俺の席に座らせ、自分は色町の席

に――雪縫の隣に座った。そわそわしている彼女を前に、どこから話したものか頭を悩ませる。そう、俺は別に糾弾がしたい訳じゃない。腹を割って話したいだけだ。

……でもまあ、それが糾弾とどれだけ違うのかは、微妙なところだけどな。

「大したことじゃないんだけどさ。ただ……この話をしないと、お前とこれからも一緒にいるのは難しいと思ったから。しんどくても、話す必要があると思った」

「……な、なに？」

楽しい話じゃないことはわかってくれたみたいだ。雪縫はこわごわ尋ねてきた。

なので俺は、詰問する風ではなく、あくまでも雑談の延長として続けた。

「お前さ、事故以前の俺と、別に仲良くなかったんじゃないか？」

「――――!!」

「つうか、ただの他人だったんじゃないかと、そう思うんだけど……どうだ？」

「……そんなこと、ない……」

それは否定になっていなかった。今にも泣き出しそうな顔で、それでも弱々しく首を横に振っただけでは、俺の言葉を否定できているとは言い難い。

そんな彼女の様子を痛ましく思いつつ、でも俺は追及の手を緩めなかった。

「どうやら俺さ、牛肉がすげー苦手らしいんだ」

「……え？」

「で、その理由を父さんに聞いたら、母さんが死んだ日に食ってたのが、牛肉だったらしくてさ。俺はそれ以降、まったく牛肉が食べられなくなったんだ。――だから、もし雪縫とデートしたとしても、お前と一緒に牛丼屋に行くとは考え辛いんだよ」

「あ……」

「また、もし仮に牛丼屋に入ったんだとしても、俺は牛丼だけは絶対に頼まなかっただろうな。でも、あの時――俺が牛丼を買った時に、雪縫は何も言わなかった。それはやめろとも、前回のデートでは違う物を食べていたとも、言わなかった。そうだな？」

「う、うん……」

「つまり、俺とお前が過去にデートしてたってのは、嘘だった。俺達はそんな仲じゃなかったらしい。――ちなみに、俺が牛肉嫌いなのは、少し仲の良い奴なら知ってることみたいだぞ。でも、お前はそれを知らなかった。知らなかったから、俺が過去にデートで連れて行った場所として、俺が選ぶはずのない牛丼屋を選んだ。俺が牛丼を注文した際にも、注意することをしなかったんだ」

「……」

「デートは嘘だった。俺のことをよく知らない。ついでに、記憶も一切戻らない。だから

俺は、考えたんだ――雪縫と一緒にいた過去っていうのが、そもそも俺にはなかったんじゃないかって」

「……そ、れは……」

「反論があるなら聞かせてくれ。俺が間違ってんなら怒ってくれていい。どうだ？」

途中、どうしても犯人を問い詰めるような形になってしまったことを、自分でも後悔しつつ、最後はできるだけ優しい声音で問いかけた。……教室に沈黙が落ちる。雪縫は顔を俯け、小さく肩を震わせ、浅い呼吸を繰り返した。

そのまま、彼女の言葉を静かに待っていると――やがて、雪縫は顔を上げた。

そこに儚げな表情を浮かべた彼女は、一粒。その目から真珠のような涙を零した。

「ごめん、なさい……」

「……」

「ごめん……ごめんなさい、くーさん……くーさんの言ったことが、正しい……私は、嘘つき。くーさんとデートをしたのだってあれが初めてだったし、くーさんが牛丼ダメなことも、知らなかった……苦しい思いさせて、ごめん……！」

「そっか……どうしてこんなことをしたのか、聞いてもいいか？」

「う、うん……う、うっぐ……ひっく……！」

「大丈夫、待つから。落ち着いたら話してくれ」

先の一粒が決壊に繋がったんだろう。雪縫はぽろぽろと、目から雫を溢れさせ始めた。

……俺がした話のせいで、一人の女の子がこんなに悲しげに泣いていると思うと、なんだか申し訳ない気持ちになる。そのまま、雪縫の回復をしばらく待っていると、やがて彼女は手のひらで目をごしごし擦りつつ、口を開いた。

「私には、くーさんとの関係がなかった……」

「うん」

「色町さん、花屋敷さんには、あった……詳しくは知らないけど、ちゃんとした繋がり。だから、くーさんが目を覚ました時、私は置いていかれると思った……また」

「また？」

「うん。――本当はもっと前から、くーさんに話しかけたかった。こうして、お喋りがしたかった。でも、私は臆病だから……できなかった。できないうちにクラスが替わって、くーさんとは更に距離ができて――それから、くーさんが事故にあった」

「……」

「悲しくて毎晩泣いた……我慢できなくて病院にも行った。そこで、目を覚まさないくーさんを見て、思った……なんで、何もしなかったんだろうって。――こんなに大好きなの

に。どうして遠くから見てるだけだったんだろうって、後悔した」
雪縫はそんな言葉と共に、自嘲気味に微笑んだ。それから、彼女はもう一度目元を拭うと――静かな。けれど確かな熱を持って、俺を見つめた。
「もう、後悔したくないって思った。くーさんとお喋りするためなら、頑張ろうって思った。だから、嘘もついた。ずるい女になろうって思った。……記憶を失ってしまったのなら、私もスタートラインは他の二人と同じだって、卑怯なことを考えた。醜い私。でも、何もしないよりはいい。もう、愚直な女の子でいるのは嫌だった」
「……」
「もちろん、くーさんに嘘をつかないで、純粋に仲良くすることだってできた。でも、その場合……関係のある二人に勝てないと思った。――勝ちたいと、思った。そう思うのを止められなかった。だから、私は――」
「そうか……」
「……ごめん、くーさん。こんな私で。嘘をついて、ごめんなさい……」
「いや、それは……」
嘘をついたこと、それ自体を謝るのはいい。わかる。
ただ、自分の人間性を俺に謝るのは、ちょっと違う気がした。……だって、彼女は必死

だったんだ。嘘をついてでもやりたいことがあった。だからそれを、被害者である俺が許してあげたいと考えてしまうのは、でも……許されざる甘さ、なのだろうか。
考えていると、全部言ってすっきりしたのか、雪縫はふいに可憐な微笑を浮かべた。
「実は私、一年の時はくーさんと同じクラスだった」
「へえ、そうだったのか……その時、色町さんや花蓮は？」
「花屋敷さんは別のクラス。色町さんは同じクラスで、その頃からくーさんの隣にいた」
「なるほど、色町とは古いんだな……」
「……最初は、変な二人がくっついてるなって、それだけだった。でも、あの時――事故以前のくーさんと一度だけ話した、あの美術の時間があって、私は……えへへ」
「そっか。全くの無関係って訳でもなかったんだな」
「でも、その一回だけ。たぶん、くーさんにとっては――くーさん？」
――優しい眩暈が俺を襲う。ちりちりと電気信号が脳内を駆け巡った。痛みは浅い。けれど長い頭痛。いつもより深い場所から、その光景は引っ張り出された――。
「……」
美術室には二人だけがいた。彼と、雪縫。彼は一心不乱といった様子でキャンバスに絵

を描き、雪縫はそんな彼を呆れた様子で見つめていた。——彼女が美術室の鍵を預かっており、彼がここを出ないことには鍵が閉められないのだ。

雪縫はそっと彼の背後に近づき、声をかけた。

「まだ終わらない？」

「——うお⁉　あ、ああ……悪いな」

「何描いてるの」

雪縫はキャンバスの絵を見やる。——なかなか絵は上手かった。王子の銅像を取り囲むように、町民が楽しげに騒いでいる絵。そんな王子像の肩には、これまた幸せそうな顔をしたツバメが、一羽だけ止まっていた。

「……何の絵？」

「い、いや、説明するのは恥ずいんで、勘弁して欲しいんだが……」

「私、あなたのせいで帰れない。それくらいして欲しい」

「……『幸福の王子』って童話、知ってるか？」

「名前だけは」

「ざっくり説明するとな——貧困にあえぐ町があって、その町を助けるために王子の銅像が、ツバメの手を借りて、自分の体に使われた金を配るっていう……まあ自己犠牲の話な

んだよ。自己犠牲は美しい、見返りを求めるのではなく、自らそうするという行為それ自体が尊いのだ——みたいな」

「ふうん」

「昨日ネットサーフィンしてたらこの話を見つけてさ、読んだわけ。良い話だなあ、俺これ好きだなーっつって。でも最後、ツバメと王子はどうなったと思う？」

「どうなったの？」

「ツバメは誰にも理解されずに死に、王子はガラクタとして処理された。——一応、その魂は天使に救い上げられた、的なことは書いてあるんだけど……どうよ？」

「納得いかない……」

「だろ？　童話ってそういうとこあるんだよな……んで、俺はそれにムカついて、この絵を描いてるわけ」

「？？？」

いまいち理解しかねる、といった様子で雪縫は首を傾げた。そんな彼女に対して、彼は照れくさそうに頬を掻きながら、結論を告げる。

「ハッピーエンドが、見たかったんだ」

「——」

「ツバメは死なずに飛び回り、銅像は綺麗に修復され、一体と一羽は報われました――めでたしめでたし。そんな物語が見たかった。でも俺は作家じゃないから、そんなことできないわけでさ……だからせめて、美術の時間に、この絵を完成させたかったんだ」

「……そう」

「そんな訳で、もう少しだけ待ってくれ。完成したら満足するから」

「……うん、待ってる」

それから彼は再び、その絵に挑みかかっていく。そんな彼の様子を、彼女は。

先ほどまでとは少し違う熱を持って、静かに見つめるのだった――。

「……そういやあったな、そんなこと。『幸福の王子』、大嫌いで大好きだった」

「え……くーさん、お、おも……思い出して、くれた？」

「ああ。あん時は迷惑かけたな、雪縫」

「――――」

涙が再度、彼女の目から溢れ出す。顔を俯け、それを手で隠して「ううううっ」と泣き声を漏らした。……脱水症状にならないか心配だ。でも、俺がそれを思い出しただけで泣くということは、いま俺が見た記憶は雪縫にとって、それだけ大事なものなんだろう。

そんなにもあの一場面を、大切に思ってくれている事――それが俺には嬉しかった。

そうして、また雪縫が落ち着くのを待っていると、ふいに。

彼女はまだ涙でぐしゃぐしゃな顔のまま……俺を見て、こう言った。

「ありがとう、くーさん。私、くーさんが私とのことを思い出してくれたって、それだけあればいい。――短かったけど、いままでありがとう」

「え……？」

「さよなら、大好きな人」

儚げな顔でそう告げると、雪縫は椅子から立ち上がり、焦りのない足取りで教室後ろの扉へと向かった。――一歩、また一歩と、彼女との距離が遠くなる。

こうして、雪縫と俺の関係は、終わろうとしていた。

◆◆◆

そもそもを考えれば、おかしいことだった。

いま俺という人間の根底にあるのは、『記憶を取り戻したい』――それのみだ。であれば、雪縫が俺にとって関係のない人間……他人であるとわかった時点で、彼女は俺にとって有益な人間ではなくなったのだから、そんな雪縫に対して俺が取るべき行動は、『無視』と

いう冷たいものである筈なのだ。それなのに――それでも、俺は彼女と話をした。
ちゃんと話をして、雪縫との新しい関係を、正しく始めようとしたんだ。
それはもう既に、嘘をついた彼女を、許したかったってことじゃないのか？
「――雪縫っ！」
俺は勢いよく椅子から立ち上がる。扉を開け、教室を出て行こうとしていた雪縫が、肩をびくっと跳ね上げさせ、立ち止まった。恐る恐る振り返り、こちらを見やる。
「ううっ……くーさん……」
それは、見るに堪えない顔だった。恵まれた容貌をしている雪縫はいま、目を腫らし、鼻水を垂らし、頬を猿のように上気させている。可愛い顔が台無しだ。
でも、真実の彼女を見つけた。
俺はそんなことを思いつつ、一歩、また一歩彼女に近づく。それから、彼女がもう逃げ出さないように。俺の言葉をちゃんと受け取ってくれるように――ぎゅっ、と。
その小さな、強く握れば折れてしまいそうな手首を、この手で握った。
「え……な、なんで……？　やめて……離して……！」
「聞いてくれ、雪縫」
「や、やめて……！　優しくしないで！　わ、私は、酷いのに……くーさんに嘘をついた

のに！　な、なのに、こんな風にしないで！　こんな風にされたら、私……私……！」
「そもそも今日は、お前を許すつもりだった」
「――――」
俺がそう言った瞬間、雪縫は俺を呆けたような顔で見つめた。
それから彼女の表情は、せわしなくころころ変わっていく――まるで、いまこの状況において正しい表情はどれなのか。それを模索しているかのようだった。
喜悦。悔恨。苦痛。微笑。――唇を噛み、首を振るのが、彼女の最後の結論だった。
「……くーさんは優し過ぎる。私は、嘘をついた。くーさんを傷つけた。だから、それに見合う罰を、受けないと……」
「それは、誰が望んでるんだ？」
「え……？」
「被害者である俺が望んでいない。じゃあそれは、誰が望む罰なんだよ」
「そ、それは……」
雪縫は視線を泳がした。俺を見る。俺じゃないどこかを見る。――どうやら彼女、この話し合いにおいて、自分の分が悪いことに気づいていないらしい。
だってそうだろう？　雪縫は加害者で、俺が被害者。そして被害者の俺が彼女を許して

しまったら、当然――罪に対する罰なんか、もうどこにもありはしないんだから。
「わ、私が……？　私が、罰してもらいたい、から……」
「うわ、くだらねー。そんなのはくだらねーよ、雪縫。――嘘をついた。それは確かに悪いことだ。もちろん騙されて、俺だってムカつかなかった訳じゃない。でも……お前のついた嘘は、許されないほどじゃないんだよ」
「そ、そう、なの……？」
「ああ、そうだ。お前は嘘をついた当人だから、随分と自分のしたことを重く受け止めてるみたいだけど、嘘をつかれた俺からすれば、全然大したことないぞ」
もっと大胆な嘘をつけば良かったのにと、そうまで思う。実は俺と恋人なんだとか、そう言ってやりたい放題すればよかったのに。――でも、彼女はそこまでしなかった。
つまるところ雪縫は、嘘をつくのが下手なのだ。
それは逆に言えば、彼女が嘘のつけない、善人であることの証明に他ならなかった。
「つか、ごちゃごちゃ考えるのはヤメにしないか？　……もういいよ。お前は嘘つきで、過去に俺と関係なんか全然なくて、デートとかもしたことなかったけど、これからは俺と関係していく。それだけでいいじゃん」
「そ、そんな……いいの？　私、そんな――」

「うん。友達になろう、雪縫」
「……うっ。うあああああ、うあああああああっ……！」
また声を上げて泣き出す雪縫。彼女は俺の手を両手で握り、力を込める。それから、そっと自身の顔のそばに俺の手を持ってきて、大切そうに頬を寄せた。――正直、この愛らしい少女を抱きしめたい衝動にかられたが、それはしない。俺は雪縫との関係を正しく始めようとは思ったけど、彼女に恋している訳ではないから。それはできなかった。
「今日はよく泣くなあ、お前……」
「うううううっ……く、くーさん……！　あ、あり……ありが、と……ううっ……！」
「うん……好きなだけ泣いてくれ。いつまでも待ってるから」
「ううう、くーさぁん……ううううっ……！」
そんな風にして、雪縫は俺の手を大事そうに握りながら、泣き続けた。さっきからずっと泣きっぱなしなので、いい加減、彼女の体内にある水分が無くならないかマジで心配になってきたが……まあ、雪縫の思うまま、好きにさせてやろうと思う。
――あの日は俺が、彼女を待たせてしまったから。
今度は俺が、彼女の気が済むまで待つ番なのだった。

続きは、4月17日発売のファンタジア文庫で！
©Gikyoku Kawata, Ashima 2020